

389
73



始



389-73



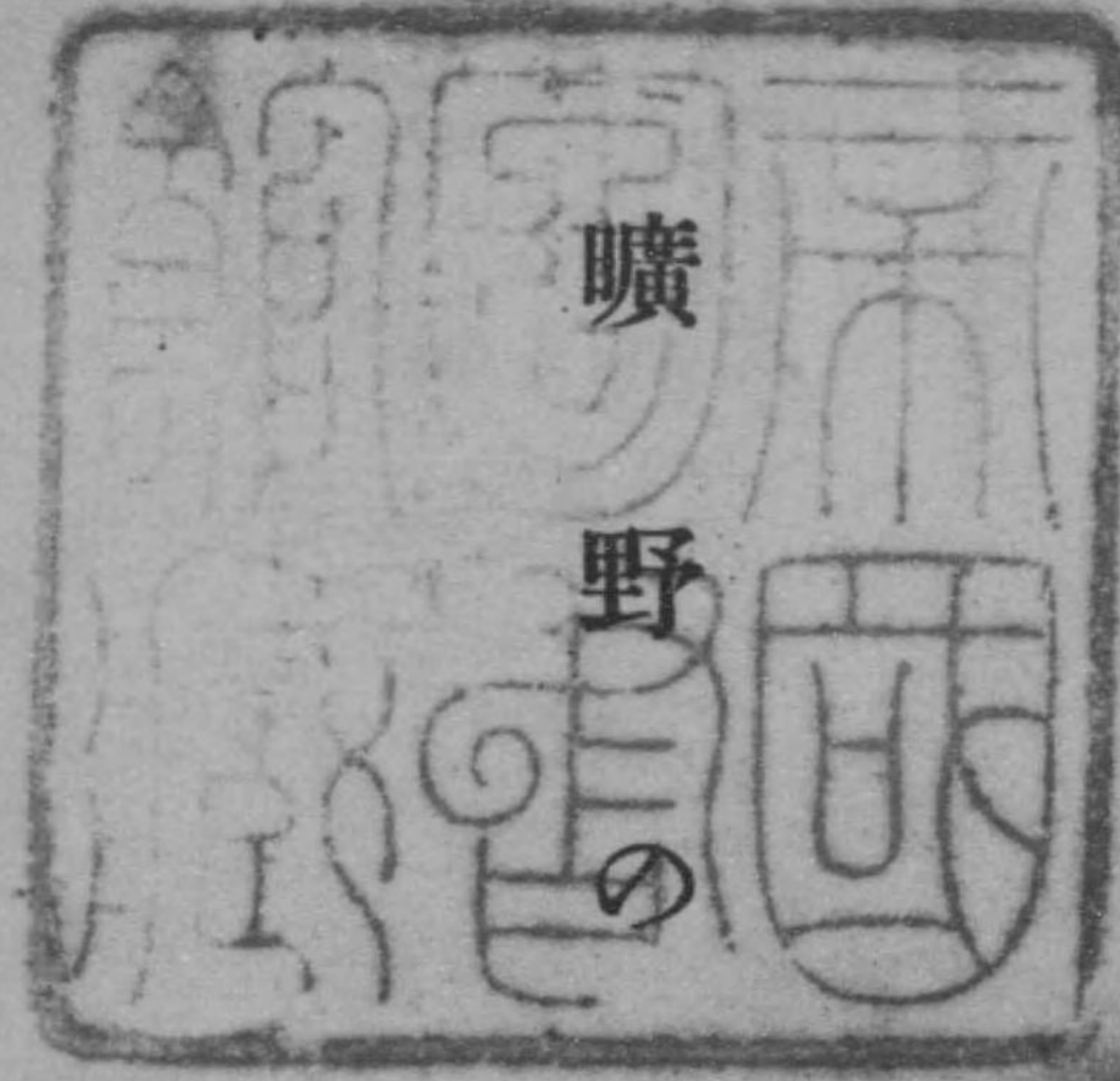
金星堂名作叢書(1)

曠野の戀

田山花袋著



大正
11. 3. 27
版 內 交 星



戀

田山花袋著



政代には何が何だかわからないやうな気がした。何うしてかう自分は複雑した運命の中にあるのか。何うしてかう自分でもわからないやうな人生の巴渦の中に浮きつ沈みつしてゐるのか。それはかの女に取つては、人生は痛苦の世界ばかりではなかつた。また歡樂の世界ばかりでもなかつた。不幸な世間であると共に、このまゝ捨て去つて了ふには惜いやうな氣のする世間であつた。しかし數奇と謂つて好いか、不運と言つて好いか、それともまた不遇と言つて好いか、それは判然とかの女自身にもわからなかつた。

世間は自分について何と言つてゐるか。何と批評してゐるか。それは判然わからなかつたけれども——第三者の言つてゐることは到底完全にわかりやう筈はなかつた。

たけれども、兎に角、餘り好く言つてゐないのはわかり切つてゐることであつた。或は毒婦と言つてゐるかも知れなかつた。或はまた虚榮に富んだ、男を騙すことなどは眼中に置いてゐない、始末に終へない女として眺められてゐるかも知れなかつた。現にさうした批評は多少耳に挟んだこともあつたし、さうした人達に齒されないう冷たい眼色に邂逅したことも、決して一度や二度ではなかつたのである。しかしかの女は、他から、世間の女達からさういふ風に眺められることを寧ろ得意にしはゐなかつたか。

『尠くとも、自分は美しい』

かう思つて、さうした冷めたい多くの眼色に對しても、思ふ存分に振舞ふやうな態度を見せることを得意にしては來なかつたか。否、さうした態度のために益々世間から誤解されるやうな形になつて行つたのではなかつたか。

『そんなことは思ふまい……、いくら思つたつて、しやうがない……』

かう自分に言つて、政代はびたりとその集まつて来る考へを押へて見た。しかし、それは容易にとどまらうとはしなかつた。却てあべこべに、いろいろなことが雜然としてかの女の頭の周圍に湧くやうに集まつて来た。

急にかの女自身が可哀相になつて来た。さうした數奇な生活をやつて来たかの女が悲しくなつて来た。かの女とて、決して世間で思つてゐるやうなさうした女ではない……。やさしい心もあれば、眞面目な心もある。涙もあれば眞もある。男のために死なうと思つたことも一度や二度ではない……。否、あのSのためには出来るだけのことを自分は盡した。女として誰に話しても同情され得るだけのまごゝろをかゝる女は盡した。しかし何うにもならなかつた。いくらまごゝろを見せても、戀心を燃やして見せても、何うにもならなかつた。何故だらう？ かの女が我儘であつ

た爲か。一本氣に、眞直に、そつちにはかり心を向けてやつて来たためか。その時、Sは言つた。

『矢張さうだ……。お前はさうしてはゐられない女なんだ。家庭をつくつて、子供の面倒を見たり何かしてはゐられない女なんだ。しかし、さう言つたからとて、決してお前を責るには當らない。さうお前は出来てゐるんだから……。まア、爲方がない。各自に行く道を行くより他爲方がない』かうSは言つて、理解して別れて行つて呉れた。

夫からもう十年近い年月は經つて行つた。その間に何があつたか。何ういふことがあつたか。何ういふ運命がかの女と一緒に伴侶になつて行つたか。かう思ふと、政代は堪らなくなつて袖で顔を掩ふやうにした。

『その爲か？、さうした性質が、この自分の體の何處かにひそんでゐるためか。いや、それは性質ではなくて、他に、さうなつて行かなければならない徑路があつたのか？』何は措いても、さうしたことが、その移り易い無條件に新しい戀の方に引張られて行く心と體とが、かの女に、さうした數奇な運命を齎らして來たに相違なかつた。

丁度それは暗い闇の中に、美しい、目も眩ゆるくなるやうな、色彩の濃やかな虹を懸けたやうなものであつた。政代はその虹なしにはゐられなかつた。その美しい虹を闇の中に想像せずには生きてゐられなかつた。そのために、そのためにのみ、かの女はその落着いてゐなければならぬところから出て來た。そのためにあらゆるものを犠牲にしてそして出て來た。

そのそぞろな、喜びに戰慄するやうな心持——それに比べたなら、その刹那の歡樂に比べたなら、長い、暗い、淋しい一生などは何うでも好いやうな氣がした。二つの心と心との燃焼、魂と魂との抱合、それを頭に浮べると、何うして、世間の多くの人達は、女達は、その歡樂のために、身も世も投げ出してはないのであらうかと疑はれた。また何うして、その暗いさびしい、長い夜のやうな闇の中に躊躇つて平氣で暮らしてゐるかがわからないやうな氣がした。

かの女には遠い、遠い滿洲の田舎の停車場が思ひ出されて來てゐた。そこには、高粱は既に刈り取られて、廣漠とした野に夕暮の雲のさびしく赤く靡いてゐるのが見えた。さながら繪のやうに。新しい描法を以て巧みに描き出されたすぐれた繪のやうに——。それを、その野を、その夕暮の雲を、その停車場の窓のところに立つ

て、凝と深く眺めた時のことをかの女は思ひ出した。

そこから出て行く汽車は、その夜の九時に、その西滿洲のある温泉に着く筈であつた。そして温泉の旅舎には——その設備が滿洲で一番すぐれてゐると言はれてゐるその旅舎には、かの女に逢ふために、かの女と靜かにそこに一夜を語り明すために、反對の方面から、ある男が同時にやつて來ることになつてゐるのであつた。それは譬へて見れば、丁度、一つの直線の上に、二つの燃えかゝつた心があつて、それが兩方から、汽車の進んで行くにつれて、次第に互ひに近づきつゝあるやうなものであつた。政代の心は、そゞろに喜びに慄へすには居られなかつた。

その男はKであつた。滿洲でも若い實業家としてその名を知られてゐるKであつた。かの女は、汽車に乗つてからも、堪らなく胸が躍つた。遂に、そこに、かれがわた！ かの女を待つてゐたかれがわた！ といふやうな氣がした。否、かの女の

今まで經て來たすべての徑路は、こゝに達するため、そのかれに達するため、長い間準備されてゐたやうにすら政代には思はれた。かの女は、二三人しか客の乗つてゐない二等室の隅のところに、窓の方に向つて坐つて、絶えず動いて行つてゐる荒涼とした野を眺めた。

やがて明るい光線がぱつと室内に漲りわたつて來たと思つて、ゆくりなく其方を見た時には、そこには、今しも、大きな、銅の盆のやうな日輪が、廣い淋しい野の地平線の上に光茫もなく淋しく落ちて行くところであつた。かの女は、何とも言はれない心持で、じつとそれに見入つた時のことを思ひ出した。

荒漠とした滿洲の野に、大きな赤い夕日が落ちて行つたさまを政代はつゞいて思

ひ起した。平生ならば、とても堪へられないほどのさびしさが身を襲つて來たであらうが、その日はKがその温泉場に向うから一刻毎に近づきつゝあることを思つて、さびしいとも悲しいとも思はなかつた。かうした異郷の野にさまよふ數奇な運命をも歎きはしなかつた。かの女は一年に近い間、彼方から此方へと漂泊して行つたことを思ひ出した。いろいろな人にも、いろ／＼な事件にも、種々な悲喜劇にも逢つたことを思ひ出した。かの女は舞臺にも立つた。自信もない歌を大膽に舞臺で唄つて見た。人形などを持つて行つて、その異郷の人達に高く賣りつけても見た。北京に行つた時には、その紹介の好かつたのとそのためにより好いところに入れたのと、かの女の美貌と、その巧なお世辭とのために、その人形賣の行商が思ひの外に成功して、その間少しも旅費の心配がなかつたばかりではなく、歸つて來た時には、儲けた金が思つたよりも多額に胴卷の中に藏はれてあつたことを思ひ出した。

『あゝもう東京に歸らう。こんなに、いつまでも異郷にさまよつて言はゞまア、耻辱を曝してゐるよりも、これを機會に、東京に歸らう。さうだ、それが好い』かういふ風に思つて、かの女は北京から大連へと歸つて來た。そこには、豫てかの女の四借をしてゐた二階の間があつて、一つ二つの行李やら、荷物やらがそのまゝ、そこにあづけて置いてあるのであつた。また、東京の方から來る消息なども、其處でかの女の歸つて來るのを待つてゐるのであつた。しかしそれよりもかの女の心の中に、次第に微かに幻影となりつゝあつたのは、その、その大連の市街のB街にあるY商會の大きな建物であつた。政代はその商會の一室にその主人であるKと相見ることを楽しんだ。その明るい顔と快活な聲と眞面目な話とに接することを樂んだ。恐らく、その時そこに訪ねて行つた時、いつものやうにKがゐて、莞爾としてかの女を迎へて呉れたなら、假令戀心は起つたにしても、さうした仲になるやうなことは

なかつたであらう。しかし、不幸にしてKはゐなかつた。商用で、朝鮮の京城へ出かけて行つてゐて、もう歸つて来る日取にはなつてゐるけれども、いつ歸つて来るかといふことは、よくはつきりわからなかつた。政代は失望した。しかし何うすることも出来なかつた。その支配人のAと北京の話などをして歸つて来た。

かの女はその下宿のさびしい後園に、草花の赤や黄や紫が、すつかり初冬の霜に萎れて了つてゐるのを見出した。何とも言はれないさびしい悲しい心持がした。今まで經て来た自分の境涯が一つ一つその前に展げられて来るやうな氣がした。そしてその數奇な美しい繪卷も既にその半を展げ盡したやうな氣がした。かの女は最早三十に近かつた。いつまでその美貌と戀心とを頼りにしてゐることは出来ないやうにも思はれた。それに、冬になつて行く滿洲の空がさびしかつた。懷郷の心が湧くやうに起つて来た。政代は久し振で、東京にゐるある新聞記者に手紙などを書く氣にすらなつた。

『もう、冬だわね。これからは寒くなるばかりね』

こんなことを政代は宿の上さんに言つた。その二階の一室から見える碧い海には鷗に似た白い鳥が頻に縦横に飛び交してゐた。夕暮などに聞くボウといふ汽船の音が何とも言はれない悲しい情緒をかの女の心の中に捲き起した。

愈東京に歸る支度をして、下宿の上さんなども別れを惜み、もう一度それとなしに商會に寄つて見ると、この間はゐなかつた書記のM氏が丁度居合せて、『谷山さん、好いところに來た。大將、歸つて來ますぜ』かう言つて莞爾して迎へた。

『さう……何時？』

『明日は歸つて來ます』

『さう？ 逢つて行きたいわね。私、今日、午後の三時の汽車で立つて行くつもりにしてゐただけど……』

『え？』

とM氏は驚いたやうにして、『もう、そんなに早く歸るんですか。ちつとも知らなかつた。何うして、そんなに早く歸ることになつたのです……？ もう少しゐらつしやい』

『でもね』

『懷郷病ですか？』かう言つてM氏は笑つて、『大將とも話してゐたんですぜ、貴方が北京から歸つて來たら、大いに歓迎しようぢやないかなんて言つてゐたんですぜ。

行商は成功でしたツてね？ 何らかと思つて、大將も心配して居たんですよ』

『難有う……お蔭で、遊んで、行商が出來ました。皆さん、めづらしがつて歓迎して呉れたんですもの……。あ、さう言へば、Iさんにも逢ひましたよ。あの人にいろいろお世話になりました。貴方にもよろしくツて……』

『達者ですか、先生』

『え、元氣だわ……面白い方ね、あの方！ 北京をあつちとつちと引張り廻して貰ひましたよ』

『さうでしたか？ それは好う御座んした……』M氏はかう言つたがやがて、をあとに戻して、『何うして貴方は、また、さう早く東京に歸りたくなつたんです？』

『だつて淋しくなつちやつたんですもの！』

『たうとう、本音を吐きましたな……。夫は、これからは滿洲は寒くなりますから』

ね。夫はとても長くはゐられないでせうけれどもね。今日立つは急ですね。まるで足下から鳥が飛び立つやうですね』

『でも、もうすつかり支度して了つたんですもの……』政代はらへて『何うかして逢いたいわね、Kさんに?』

『大將も、そんなに早く、貴方が歸つたつて聞くと、残念がりますよ。此間から、貴方が歸つて來たらなんて、いろ／＼言つてゐたんですもの』

『私だつて、逢つてお禮を申して行かなければ、義理もすまないんですけれども……』また考へるやうにして『そして、Kさん、今何處にゐらつしやるの?』

『奉天にゐます』

『もう、奉天に來てらつしやるの?』

ある考へが忽ち政代の心頭を微妙に掠めて行つた

『處はわかつてゐて?』

『何でも、今夜湯崗子あたりに來て泊るらしいですよ』

『さう……? そんなら、都合が好いわ。あそこで、私、お待してお目にかゝりませわ』

『あゝそれが好い、それが好い』

かう言つたM氏の顔の表情にもさつき政代の心頭を掠めて行つたと同じ考へが微妙に通つて行つたらしかつた。けれどもしかし、M氏はそれと口には出さなかつた。

『それぢや、私から奉天に電報を打つて置きます。貴方が今夜湯崗子で待合せるつていふことを……。それが好い、それが好い』

かうM氏は氣さくに言つた。

大きな、火の玉のやうな落日が荒涼とした潤い地平線に没して了つてからも、野はまだ暫くの間明るかつた。低い丘がなだらかに連つて見えたり、楊柳の村が飛び飛びにさびしさうにあらはれて見えたり、路がうね／＼と丘から丘へと續いてゐるのが指さゝれたりした。かうしたさびしい野に住む人達にも楽しい夕暮の團樂はあるらしく、小さな四角な白ちやけた民家から、細い煙が絲のやうに靜かに眞直に昇つてゐるのが見えた。

到るところの停車場では、もう既に灯がついてゐた。

突然、ある停車場から乗り込んで來た二人づれの男は、相應な紳士であつたらしかつたけれども、しかも此方を見て、頻に何か合言葉見たいなことを言つてゐるの

が、政代には不愉快であつた。獨りで汽車に乗つてゐる場合、此方が一人で向うが二人である場合さうしたことは、免れないことではあつたけれども——またさうしたことを氣にしてはかうした旅も出來ないわけであつたけれども、しかも、その話、かの女に對する批評が、久しく経つても容易に止まうとはしなかつた。かれ等はかの女をそこらに、さらに出沒してゐる醜業婦の群の一人にして話してゐるらしかつた。政代は益々不愉快になつた。

しかし幸にもそれは長い間ではなかつた。K驛に來ると、その二人は此方を見い／＼、さも此方に思ひを残して汽車を下りて行つた。最早あたりはすっかり暗くなつてゐた。此處は、こゝらでは大きな一中心を成してゐる市街であるのに拘らず、灯もぼつ／＼と二つ三つそこらに見えてゐるばかりで、いかにも曠野の中のさびしい町といふ氣が政代にはした。

さうした目さはりな、いやな奴が下りたので、政代はほつと溜息をつくやうな氣持になつたが、それと同時に、強く漲るやうに押し寄せて來たのは、今夜のことであつた。このさびしいひとりの心を何ういふ風にKが取扱つて呉れるかといふことであつた。K氏が打つて呉れた電報の返電、奉天からのその返電——それは簡單に、IIシヤウチシタIIの一語であつたけれども、その一語の中にも、此方の戀心と同じやうな戀心が名残なく藏されてあるやうな心持がした。かの女はくわつと體の震へ來るやうな思ひに滿された。

それに、かうした曠野の中に燃え出して來た戀といふことが、かの女に勘からずロマンチックな心を誘つた。それも、もし北京からかの女が歸つて來た時、Kがいつものやうにそこにゐて、普通にかの女を迎へて呉れたなら——また時がさうしたさびしい初冬でなく、懷郷病も起つて來てゐず、港の汽船の音も、さうした心を催し起

さなかつたらば、かうした戀は起つて來なかつたかも知れなかつたのであつた。それはかの女は既にあまりに長くそのひとりに倦んではゐた。且張り詰めた心に餘りに多く疲れてはゐた。しかし、猶かうした好機がかの女の眼の前にあらはれて來なかつたならば——兩方から一つの場所へ、夜の温泉場へ落合ふといふやうなはめになつて行かなかつたならば、かうしたあつい戀心は決して燃えて來なかつたに相違なかつた。かの女は不思議な氣がした。かの女はこれから何うなつて行くかわからない自分の運命を凝と見詰めるやうな氣分になつた。それにしても、その温泉場は何ういふところであらうか。何ういふ風にかの女の前にはあらはれて來るであらうか。また何ういふ一夜がかの女の前には待構へてゐるであらうか。かう思つてゐる間にも、汽車は轟々と闇を衝いて、次第に湯岡子へと向つて駛つた。

湯岡子で下りたのは、かの女と二三人の支那人とだけであつた。曠野の夜の中の停車場、さびしい停車場、改札が眠さうに欠びをしてゐる停車場、それ以上に、其處にかの女は何をも見出すことが出来なかつた。温泉場は果して何處にあるのか、その近くにあるのか、それともまたいくら離れたところにあるのか、それすらはつきりとはわからなかつた。政代は一度切符を渡して、停車場を外に出ては見たが、あたりは唯直暗な闇で、何うすることも出来ないで、そのまま引返して、改札に訊いて見た。

『温泉ですか。それぢや、そこにお行きなさい。そら、そこに、すぐ前に灯の見える家があるでせう。あそこに、ホテルの番頭か何かが來てゐる筈ですから』

かう教へて呉れた。しかしそれが十分に呑み込めないといふやうにして、政代が立つて躊躇してゐると、そこは田舎のひまな停車場だけに、また對手が美しい女であるだけに、そのまま改札は先に立つて『ぢや、私についてゐらつしやい』かう言つてすたく／＼歩き出した。

歩きながら、

『車はないんですか？此處には？』

かう政代は訊いて見た。

『あるにはあるんですけども、今日はゐません。何しろ一臺しかありませんからな、さつき支那人が乗つて行つて了ひました。それに近いんですからな』

『温泉ですか？』

『え——』

『何の位あるんですか？』

『何の位つて、五六町しかありやしませんよ。そら、そこに』かう言つて、闇の曠野を指して『そこに、灯が見えるでせう。ぼつつりと……。あれが温泉のホテルですよ』

『宿屋はホテル一軒きりなんですか？』

『他にもう一軒、小さい宿屋がありますけれど、大抵此處に来るものは、ホテルに泊りますね……』

『それにしても、淋しいところですね。湯崗子の温泉つて、人がよく言ふから、もつと賑かなところかと思ひましたよ』

『何しろ、かういふところですからな』

こんなことを言つてゐる間に、かれ等は既に廂の低いある小さい家の前に來てゐ

た。

『おい、ホテルから、誰も來てゐないのかえ！』

かう言つて改札はすか／＼その家へと入つて行つた。

と、奥から慌てゝ出て來たものの足音がした。

『なまけてゐてはしやうがないぢやないか。お客様だよ』

かうまた改札は言つた。

やがて出て來た番頭は、脊の低い、いやに言葉の丁寧な四十男であつた。『ホ、今のは下りでしたか。九時の貨車かと思つた——』かう言つて其處に立つてゐる政代を闇にすかさやうにして見たが、『何うも失禮いたしました』と言つて慌てゝ提灯に灯をつけ出した。

『何うも、此頃は、もうお客様はないもんですから……』

『でも、汽車のつく度にはちやんと出てなくつては、うそだね。職務怠慢といふことになるよ』

笑ひながら改札が言つた。

『何うもすみません』

かう番頭は頭を掻いた。

政代の身に取つては、五六町でも、決して近いとは言はれなかつたけれども、しかし車が一臺もない以上、何うしてもそこまで歩いて行かなければならなかつた。で、爲方なしに、改札には禮を言つて別れて、今度は番頭の提灯について歩いた。

路は凸凹でこぼこして、注意しないと、躓いて轉びさうであつた。政代はこの番頭の提灯

の光をたよりに、辛うじてあとからついて行つたけれど、しかもをりくは立留つて、もう少し緩りで行つて貰はなければならなかつた。向うにぼつとり見えてゐる灯——それも容易に近くへはやつて來なかつた。

『夏はそれで賑かなの？』

餘り黙つて歩いてゐるのも無氣味なので、かう政代は言葉をかけた。

『夏も、春も、かなりにお客があるんですけれども、これからはどうしてもさびしくなりますな——。つい一月前までは、室も一杯だつたんぞすけども』

『そんなに賑かだつたの？』

『何しろ、滿洲では、温泉場と言つては、まア、此處ですから』

『熊岳城の近くにも、あるツて言ふぢやないの？』

『あそこよりは、何うしても、此方の方が設備がよう御座んすから』

『それで温泉宿がホテル一軒きりなんですか』
『他にもあるにはあります』

かう言つたきりで、二人はまた黙つて歩いた。

ぼつゝり闇に浮んでゐた灯は、次第に近くなつて行つた。次第に、それは大きな旅舎の門の前の赤い硝子の軒燈であることがわかつた。つゞいて、深い闇の中に、二階らしい建物の大きく高く立つてゐるのがわかつた。樹の繁みの中に、小さい別な灯が二つ三つチラチラと揺いでゐるのも見えた。

政代は不思議な氣がした。かうしたところに一夜泊るといふことは、それも單に自分一人ではなしに、あとから男がやつて來るといふことは、またこの二つの心の中に戀の火が燃え始めつゝあるといふことは、數奇なかの女の半生の繪卷の中に、色彩の濃かな一頁を添へる爲に、ゆくりなく展開されて來たサインである様にかの女には思はれた。やがて長い砂利を敷いた路がその門の中にあらはれて來た。つゞいて、その盡きたあたりに、内地の旅舎といくらかも違はない瀟洒な入口が見え出して來た。

しかもそこには灯がついてゐるだけで誰もゐなかつた。

番頭はチョット舌打したが、『何うぞお上り下さいまし』

かう言つて、持つて來た提灯をそこに掛けて置いて、そのまま奥へと入つて行つた。やがて何か言つてゐるやうな氣勢がそこからきこえて來たが、時を移さず二十七八のちよつと小綺麗な、内地の料理屋によく見るやうな、絲織などを着た、小さな女中が小走りに走つて出て來た。

『何うも失禮いたしました』

かう早口に言つて、しかも、その客の何ういふ種類の女であるかを、さうした瞬間

間にも觀察することを忘れないやうにじろりと見て、そして靜かに室の方へと案内すべく先に立つた。

『あとから、まだ、一人来る筈になつてゐるんですが、電報は來てゐなかつたでせうか』

政代はかう後から訊いて見た。

女中は振返つて、政代の顔を見返すやうにして、『別に、さういふ電報も參つてはをりませんやうでしたが……』

『あゝ、さうですか。奉天から下りで來るはずになつてゐるんですが、それぢや、すぐやつて來るつもりなんでせう』かう言ひながら政代は女中のあとについて行つた。

そこに政代は四疊半の副室を持つた八疊の靜かな一室を發見した。床にはちやんと花が活けてあり、山水の軸が懸けてあり、大きな字の額の横に長く長押に懸けてあるのをかの女は目にした。眞中には、樺の一枚板のよく拭き込んだ大な餉臺が据えられてあつた。思つたよりも立派な、瀟洒な、上等な旅舎の設備がしてあるらしかつた。

わるく疑はれないやうに、また此處等に澤山ある賤しい稼業をしてゐる女達と一緒ににされないやうに、婉曲にかの女が説明してゐるのを、黙つて點頭いてきいてゐた女中は、やがて、

『それでは、あのこの次の下りでいらつしやいますので御座いませう、それは奉天

から特別に立つて来る汽車で御座いますから』

『それが、終列車になるの？』

『いゝえ、まだ、あとに十時三十分に此處を通るのが御座います』

『さう。それでは何方かで来るんでせう』

『では、御食事はいかゞ致しますか？　すぐ支度致しませうか、それとも御一緒に――？』

『いゝえ、もうお腹が空いたの、私……』

かう突放すやうに笑ひながら政代は言つた。

女中はそのまま下りて行つた。政代は帯を解いたり、コートを脱いだり、持つて来た綿入を重ねて着たりしたが、今度女中が入つて来た時には、すぐ湯殿に案内して貰へるか何うかを訊いた。

『えゝ、えゝ、いつでも空いてをります。何うぞお召しなすつて……』

かう言つて、女中はそのまま政代を階段の下の方へと伴れて行つた。

廊下を歩きながら、

『これからは、こちらは寒いでせうね？』

『えゝ、えゝ、これからはひどいさうで御座います――』

『では、姐さんは、まだ此方に來て、冬を越したことはないの？』

『え、まだ、此間、參つたばかりで御座いまから』

『さう……それは大變ね。來たのは内地から？』

『え』

『何處なの？　姐さんは？』

『田舎で御座います』

『でも上方から此方ではないやうね。東京に近い方ね』
『よくわかりですね』

『だつて、言葉が上方ぢやないもの……。本當に何處？』

その時、丁度、湯殿の硝子戸の前に來てゐたので、女中はその戸をガラ／＼と音立て、明けた。

『私、随分遠いところなんですの。山形ですわ……』

『山形？ さう、随分遠いのね。でも、東京にゐたことはゐたのね？』

『え、東京にゐた方が長いことは長いんです。十六の年から出て、昨年まで東京にゐたんですから』

『だから、東京だと思つた……。かういふところに来ると、東京のものときくと、本當になつかしいものね』

こんなことを言ひながら、政代は着物を脱ぎにかゝつた。浴槽の中は、茫と白く湯氣に籠つて、灯もぼんやりと光茫なしについてゐるのが見られた。(靜かで好いところ)と政代は思つた。かうしたところならば、いかやうに戀心をKに投げかけやうとも、またいかやうに色彩の濃い歡樂にKと耽らうとも、誰にも氣兼ねるものもなと思つた。Kもまだ來もしないのに、またKが來ても、果してかの女の戀心を受けられるか何うか本當にはわかつてはゐもしないのに、それなのに、かの女の體はわな／＼とある期待に顫へるのを感じた。

溢れ漲るばかりに湧き出してゐる玲瓏とした湯に浸つた時には、政代は生き返つたやうな氣がした。長い間の汽車の動揺も、暗い客車の中のさびしさも、荒涼とし

た滿洲の曠野にその身が漂泊してゐることも、何も彼も忘れて了つたやうに思はれた。かの女は湯氣の漲りわたつた薄ぼんやりした光線の中に、微白くその體を現し乍ら、光茫のない灯の影に凝と見入つた。

その時のかの女は、決して自己の運命の數奇を歎いてゐる女でもなければ、またこれから先の生活が何うなつて行くかを憂へてゐる女でもなかつた。(そんなことは何うでも好い。將來やなんかは何うでも好い)こんな風に政代は考へた。寧ろそれよりも、Kがやがてやつて来るが、何うした顔色をしてやつて来るか、かの女の戀心にその身を寄せかけるやうにしてやつて来るか、それともまた堅く身を持してやつて来るか、それがかの女には心配になつた。無論、Kは此方の心は知つてゐる筈である。それはたしかである。しかし心配なのは、Kの性質がそれほど女士

れがしてゐないことである。存外堅い紳士らしいところを持つてゐることである。しかし、それが、一方にはかの女に取つて頼もしかつた。現に細君もあり子供もあ

るのを知つて居りながら——またやがてはあの辛い三角關係にならなければならぬことを承知して居りながら、かうした戀心に落ちて行つたのは、その頼もしいところがあるからであつた。と、今度は、始めてKに逢つた時のことが繰返して思ひ出されて來た。

それはまだかの女が北京に人形を賣りに行かずに、大連で音樂會などを開いて、柄にない獨唱などを舞臺でやつた時であつた。その時その慰勞見たいな會を土地の有志——有志と言つても、異郷にゐるさびしさから、またはさうしたかの女のやうな内地の女めづらしさから、好奇に開いて呉れたものであつたが、その席上で始めてかの女はKに逢つたのである。そしてその最初のKは、新しい女としてかの女に對して、盛に議論をしかけて來るやうな人であつたのである。従つてかの女とKと

は、人の大勢ゐる中で男女問題などについてかなりに聲高く、そこにゐた藝者の中には、目を睜つて此方を見てゐたものもある位に議論を闘はしたのであつた。
『ふむ、成ほど、わかつた』

後にはかうKは男らしく點頭いたりした。

そのK、その理窟すきなKとかうした心持にならうなどは、その時は夢にも思つてゐなかつたことを政代はくり返した。行く先には、なにかがある。屹度、その身に打突かつて来るものがある。未來を心配する必要はない……。最初の夫であつたSからわかれて来た時に、かう思つてかの女は出て来たが、その言葉はその後にも度々その胸に上つて来た。現に、今もまたそれが上つて来てゐた。……かう思つてゐると、突然何處から何うしてさうした考へが起つて来たかといふやうに、Sの手に残して来た二人の子供が強い力で思ひ出されて来た。(もうお勝は十二になつて

ゐる。保男は十一になつてゐる!) かう思ふと、その後、丸で逢つたことはなかつたけれども、その成人したさまが眼に見えるやうな氣がして、忽ち胸が塞るやうになつた。

(何ツて、不仕合な母親だ? さうした子供をこの滿洲の曠野のさびしい温泉場の浴槽の中で思ひ出すとは!?) 涙の落ちさうになつて来たのを政代は強て自ら押へて、(だつて、自業自得なもの、仕方がない。かう言ふことがあるのは、あの時からちやんと覺悟してゐた筈だ) 續いてかう思つたかの女は其まゝ下唇を咬むやうにした。

しかし、湯からあがつて、鏡の前に立つた時には、さうした考へはすつかり消え

て、何方かと言へば、安易な、のんきな氣分になつてゐた。
(宛で生返つたやうだ)

こんなことを獨語しながら、政代は亂れた髪を櫛で梳き上げた。
そのまゝ室に歸つて來ると、其處にゐた女中は、

『お早う御座いますこと』

『さう、これでも早う御座んしたか。随分長湯をしたつもりなんですけども……。
ゆつくり入つたんで、すつかり暖まつた……。よく暖まるお湯ですねえ』

『お湯はよく効きます。胃腸などは、ぢき治つて了ふさうで御座いますから』かう
女中は言つて、『もうお支度を出しましてもよろしう御座いますか。』

『さうですね……。もうお腹は空いてゐるんだけど、その前に、ちよつと鏡臺を
拜借したいんですがね』

『あ、鏡臺、かしこまりました』

かう言つて女中はバタ／＼と廊下に草履の音を立て、向うに行つたが、そのまゝ
そこにちよつとした鏡臺を持つて來た。

『こんなのしか御座いませんが、これで宜しう御座いませうか？』

『結構ですとも……』

かう言つて、灯の光線の好いところに政代はその鏡臺を据ゑて、そして其處に座
蒲團を持つて行つて坐つた。

お腹が空いてゐるにも拘らず、かの女がさうしてその鏡臺の前に坐つてゐたのは、
かなり長い時間であつた。男を相手にする女と同じやうに、かの女も、一本々々
と髪の毛が揃ふやうに髪を撫でたり、東髪だから、日本髪のやうにさう骨折つてつ
くらくつても好かつたのにも拘らず、あちこちと随分長く丹念に梳いたり何かし

てゐるのを女中は待ちあぐんだやうにして見てゐた。

しかしそれもすんで、膳の前にちやんと坐つた時には、來た時とは丸で別な人かと思はれるほど、それほど美しくなつてゐるのを女中は見た。

『お上手ですことねえ、まア、何んて美しく……』

流石に心から感心したやうに、かう女中は褒め立てた。

『まア、厭ですこと、さう褒めて下さつても、何も奢りは致しませんよ』

『でも、本當に、お上手で御座いますねえ。矢張、御容色の好い方は、おつくりになる氣にもなるし、またつくつてもつくり榮えが致しますのですねえ』

『まア、厭ですこと』

流石にきまりがわるいといふやうな心持を政代は感じた。

食事をすませて、茶を飲んでゐると、次第に、前のガラス戸が明るくなつて來る

のを政代は目にした。

『何でせう、明るくなつて來たのは？』

『さうで御座いますねえ……。本當に少し明るくなつて來たやうで御座いますね』

『ほ！、今時分、月が出た！』

かう言つて、政代は意外といふやうにして、其方へと立つて行つた。果してそこには、大きな月が、赤い火の玉のやうな月が、潤い遠い地平線の上にひよつくり誰かに押し上げられでもしたかのやうに美しく見事に浮きあがつてゐた。今まで全く闇に蔽はれた低い丘やら、野やら、路やら、島やらは、すべてその最初の光に明かに照されて……。

窓のところに立つて、凝とその大きな光焔のない月に眺め入つた政代には、またしても異郷に彷徨ふ數奇な運命の下にあるその身のことが悲しまれて來た。

それから尠くとも一時間は経つた。月は既に高くなつて、その水のやうな光は、一面に濶々とした曠野の中に漲りわたつた。室内には電氣の灯が明るくついてゐるにも拘らず、硝子戸の外側の方は白く銀のやうに光つて見えた。何處かで水の流れる音がした。

入つて来た女中に、

『もう來ますね？ 九時のは？』

『え、もうすぐで御座います』

かう言つて女中は持つて來た熱い湯を急須にさして、『冬なんかは、よく後れまうけれど、この頃は、後れたつて五分位ですから……』

『九時何分でしたつかわ？』

政代は小形の金時計を出した。

『九時三十五分……』

『ぢや、もう五分ですね』

かう言つて、何となく落着かないやうに、政代は女中のついで呉れた茶を飲んだ。

『大抵入らつしやいませう……』

『え、來るだらうと思ふんですけどもね。電報で返事を取つたわけではないんですけども……』

『いらつしやいますよ』

かう慰めるやうに言つて、そして女中は出て行つた。

それから暫くの間、政代は時計と相對して、二分、三分と經つて行くのを眺めた。

やがて五分が七分になり、十分になつた。それでもまだ汽車の通つて行く氣勢はしなかつた。

(後れたらしいのね)

かう政代は口に出して言つたが、しかしそれから二分と経たない中に、長く引張るやうな汽笛の音がしんとした曠野の夜の空氣に冴えてきこえて、つゞいて汽車の動いて来る音が轟々として次第に此方へと近寄つて來た。

かの女は立つて窓のところに行つて見た。しかしそこからは停車場は見えずに、唯、潤い野と、そこに照り渡つた銀のやうな月光とが見えるばかりであつた。やがて汽車は停車場に着いたらしく、長く轟く響は絶えて、エンジンの釜の湯氣を吐くやうな氣勢が夥しくあたりに漲りわたつてきこえたが、それもさう長い間ではなく、やがて再びその曠野を走る汽車の轟音の起るにつゞいて、その長蛇のやうな列車の

白い烟を後に、銀のやうな月光の中に小さく動いて行くのが手に取るやうに見えた。

しかもその汽車の轟きも、次第に微かに、微かに、後には遠い風の音か、でなければ水の流るゝ音か何かのやうになつて、そしていつか聞えなくなつて行つて了つた。

また、暫く經つた。何の音沙汰もなかつた。(來なかつたのかしら?) かう政代は思つて見たが、汽車から此處までやつて來る間のことを考へると、さう早く失望して了ふにも當らないやうな氣がした。(何しろ、歩いて來なければならぬのだから) かう政代は自ら慰めた。

しかし時間は容赦なく經つて行つた。かの女はひとり立つたりした。再び窓のところに行つて、さびしい月の光を覗いて見たりした。しかも、旅舎には、誰も入つて來たやうな氣勢もなかつた。

再び元のところに來てさびしく坐つた。かの女の心には、失望に近い心持が次第に底から持上つて來るやうなを感じた。突然、誰かの笑ふ聲がした。つゞいて何か聲高に話す聲がした。政代は耳を聳てた。

二三人の足音が下の廊下——旅舎の入口から階段の方へとやつて來る長い廊下に賑かに入り亂れて歩いて來るのが聞えた。つゞいて一緒にその折れ曲つた階段を昇つて來る氣勢がした。

(Kだ、Kだ……)

かう政代は思つた。意氣地なく胸が顫へた。

混雜した足音がかの女のゐる室の前で留つて、すらと襖が明いたと思ふと、莞爾

した女中の顔が一番先に見えて、

『いらつしやいました』

と言つて入つて來た。

つゞいて、番頭やら、他の女中やらの大勢の顔の中に雜つて、肥つた、莞爾した、血色の好いKの顔が見えた。政代はすぐ立つて行つた。

『や!』

Kは率直にかう言つて、『貴方は何時の汽車で來たんです?』

『このまへの下りで來たんです……』

『ぢや、待ちましたね、随分』

『さうでもありませんわ』

かう言つた時には、Kは既に餉臺の向うに來て坐つてゐた。手荷物を運んで來た

女中達が賑かにそれを床の間に置いたり何かして出て行つた後で、

『でも、よく待ち合せて呉れましたね』

『だつて、今夜貴方は此處にお泊りになるツて言ふ話だつたから、それぢや此處に来て、お目にかゝらうと思つて、それでMさんに電報を打つて戴いたんですの』

『好う御座んした、好う御座んした』Kはかう言つて立上つて、長押にかけたトンビのポケットから敷島を出して来て、『逢はずに、貴方を歸しては、それこそ何んなに残念だつたか知れませんか……。私は京城でも、しよつちうそんなことを思つてゐたんです。もう貴方は北京から歸つて來た時分だ……。もしひよつとすると私がゐないんで、さびしがつて、本國に歸りやしないかなんて、心配してゐたんです。矢張、蟲が知らせたんですな』

『だつて、さびしくなつちやつたんですもの……。いつまで、こんな異郷にさまよ

つてゐたつて爲方がないやうな氣がしたんですもの。矢張、女ですからね』

かう言つて、政代はあまへるやうな艶やかな態度をして、凝とKの方を見詰めた。その眼には、Kの心を惑はすに足る十分の美しさを持つてゐることを政代自らも知つてゐた。

『それで、何うだつたんです？ 北京の方は？』

『それは成功でしたの……。お蔭で、一月、二月は遊んでゐられるんです。しかし、貴方はゐらつしやらないし、季節は寒くなるし、まご／＼してゐると、今に、どんな眼に逢ふか知れないと思ひましてね……。』

『で、もう、すつかり大連を立つて來たんですか？』

『え、荷物も、手紙さへやれば、内地に送つて貰ふやうに、荷づくりをして、宿に置いて來たんですの』

『それは残念ですな』

かう言つたが、Kは考へて、『しかし、本當にいつまでこんなところに残つてゐたつて、爲方がないには爲方がないですね……。こんなところにゐるよりも、東京に行けば、何んな好運が待つてゐるかも知れませんからな』

『好運なんか、何處へ行つたつて待つてなんかゐはしませんけどもね』

『そんなことはありませんよ。貴方なんか、いくらだつて、好運が待つてゐるにきまつてゐますよ』

『さう見えますかね、これでも？』こんなことを言つて政代は笑つた。

二人は暫し黙つた。しかし、それは互ひの心を捜すやうなものであつた。その沈黙は、互ひに言葉を交はしてゐるよりも、より以上に、互ひの心と心とを引附けた。政代はじつと見た眼を男から他へと外して了つた。

暫くして政代は訊いた。

『貴方、よく此處にお出でになるの？』

『よくツて言ふほどでもないけども、知つてゐるには知つてゐますよ』Kはかう言つて、『滿洲では、こんなところにも遊びに来るより他、しやうがないんですからね』

『さうでせうね……。しかし、それにしては、もう少し立派な設備が出来さうなものですね』

『でも、これでも、好くなつたんですよ。もとは小さな旅舎が一軒あつたきりなんですから……』

こんな話をしてゐたが、Kは、急に、
「貴方、もう湯に入った？」

「え……さつき」

Kは笑つて、

「もう一度入りませんか？」

「だつてね？」

「湯のおつきあひは、ちよつと無理かな」かう言つて、Kは洋服をドテラに着更へて、「何れ一つ、湯に入つて、暖つて来るかな。もう満洲も寒くなりましたな。内地なら、十二月の初め頃の寒さですね？」

出て行かうとしたが、また戻つて来て、

「勿論、食事はすんだでせうね？」

「私？」

「え」

「すみました」

「さうだらうな、もう……。しかし、湯から出て来るまでに何か、女中にさう言つて頼んで置いて下さいな。何か旨いものを二品か三品……」

「よう御座んす」

「それに、酒を忘れてはいけませんよ。一番好い酒を——」

かう言つて、Kはそのまゝ廊下へ出て、足音高く、曲つた階梯を湯殿の方へと下りて行つた。

手を鳴すと、いくらか年の老とつた、此處に長く居馴れてゐるらしい脊の高い女中が入つて来た。

Kの言ったことを頼んだあとで、

『姐さん、此處には、もう長くゐるんですか？』

『え、もう三年ほど』

『そんなに長く……。随分さびしいでせうね』

『馴れると、さうでも御座いませぬの……。唯、寒いのが困りますけども……』

『さうでせうね。寒いでせうね。炬燵おたなに入つてでもゐなくては、凌げないやうでせうね』

かう言つたが、すぐあとをついで、

『Kさん、よくいらつしやるの？ 此處には？』

『え、よくいらつしやいます。奉天の歸りなどには、いつも、寄つて泊つていらつしやいます』

『さうー』

『何しろ、お忙しい方なんですからね。長く、御滞在になつてゐらしつたことも御座いませぬけども……。それでも、いつかは、店員の方と一緒に、大連の藝者衆を大勢伴れていらつしつたことが御座いました。何でも昨年の春で御座いました。その時、その店員の中に、Mさんといふ方が御座いましたね……』

『あ、Mさん……』

『御存じですか、そのMさんに、その藝者衆の一人が惚れたとか、何うしたとかで、その藝者とMさんの顔に墨を塗るとか何とかで、大騒ぎをしたことが御座いましたよ』

『へえ？』

『元氣なお方ですね、あのMさんといふ方も……』こんなことを言ひながらその女

中は出て行つた。

その夜のことは、今でもはつきりと政代の眼の前にあらはれて見えた。Kが湯から出て来て其處に坐つた時には、もう酒や、盃や、料理などが一杯に餉臺の上に並べられて、その年を取つた方の女中が、馴れた調子で徳利を取上げては酌をした。「まあ、およろしいぢや御座いませんか」などと言つて、成るだけ控えるやうにしてゐる政代の盃にも酒を注いだ。

Kは始めは軽い調子で、其女中に、政代のことを話したり、舞臺で獨唱をやつたことを吹聴したり、北京に人形を持つて行つた話を大袈裟に話してきかせたりしてゐたが、次第に眞面目な調子になつて——不思議に思はれるほど眞面目な調子にな

つて、男女の問題だの、狹斜街の女の話だの、家庭の妻子の問題などを頻に話し始めた。Kの説では、どうしても女は家庭的であらねばならないもの、さうでなければ、何うしたつて、男の玩弄品にならなければならぬもの、いくら新しい女だからと言つて、とても男と同じやうに爲たい放題のことをしては生存してはゐられないものといふのであつた。始めは政代も好い加減にしていきてゐたが、次第に、その話が高調されて行くので、終にはそれに調子を合せずにはゐられなくなつて行つた。

「だつてそれは壓制ですね……」

かうかの女が言ふと、

「壓制だつて、何だつて爲方がない。男女の間は、さういふ風に出来てゐるのだから……」

『いえ、それは舊式な見方です。さういふ風に、女が出来てゐるのではありませぬ。これまでの女が育氣地がなかつた爲めに、さういふ風に男から思はれて了つたのです。それが、男女問題では、先づ一番先に改良しなければならぬことなんです』

さういふ風に政代は話した。かの女は決して負けてはゐなかつた。後には、Kの方から折れて、

『まあしかし、それは話だ……。無論、もつと細かく入つて行けば、それ以上の交渉が男女の間にあるにはきまつてゐるけれど……。』などと言つた。

それにしても、政代はその夜、何を話したであらうか。聞き囁りと言へばそれに違ひなかつたけれど、而もとても傍に坐つてゐる女中などにはわかりもしないやうなハイカラなことをかの女は饒舌出しはしなかつたか。否、K自身ですら、かの女

の世間に博く戀の道に深いのに感嘆するやうな巧いことをかの女は話しはしなかつたか。政代はその時最初の夫であつたSにわかれた時のことなどを話したことを思ひ出した。子供にわかる辛さもあつたが、それ以上に、本當の意味のある生活をしたかつたことなどを話したことを思ひ出した。

『ぢや、貴方は今でも本當の意味ある生活は家庭に求めることは出来ないと思つてゐるんですか？』

その時眞面目でかうKが訊いたことを政代は續いて思ひ出した。

政代は言つた。

『え、さう思つてゐます。今でも、今のまゝの家庭では、とても本當の生活は求めることは出来ないと思つてゐます』

『ぢや、夫から後、家庭以外に本當の生活は求められましたか？』

『さア、さう言はれると、はつきり求められたとも言はれませんね。矢張、今でも辛い辛い思ひをして、その本當なものを求めてゐますね。でも、かういふことだけは言へますわ。家庭にゐた時よりも、本當に近いことはしてゐると思ひますわ。生効があるといふ境まではまだとても行けませんけれど、あとになつても後悔しないだけの生活はしてゐると思ひますわ』

『本當にさう思ひますか？』

『え、本當に——』

『本當なら、えらい！』

かうKは感心したやうに言つて凝と政代の顔を見た。

『それで、これから、何うしやうツて言ふんです？』

Kは一步を進めた。

『何うしやうツて、別に——』

『矢張、放浪してゐやうツて言ふんですか？』

『別に、放浪しやうとも思つてゐないわ……。だから、今度も、東京へ歸らうと思ひ立つたんです……。いつまで、こんなにして皆さんのお世話になつてゐたつてしやうがないと思ひますもの』

『東京に行つたつて、矢張、同じぢやないですか。矢張、放浪ぢやないですか？』

『さうね、放浪かも知れないわね……。でも好いの。東京に歸れば、助けて呉れる友達がありますから——』

『友達！ 友達！』

とKはまた突込んで、『貴方なんか、男の友達なんか、とても出来つこはないでせう？』

『何うして？』

『貴方の周圍に集まる男性で、終ひまで友達で甘んじてゐるものは恐らくはないでせうからね』

『さうでせうかね？』

『さうですとも……。それは私は誓つて斷言する。友達のやうな顔をして、貴方の傍に寄つて行つたつて、一皮むいて見れば皆な狼でさ』

『ぢや、貴方は？』

かう政代の方からも突込んで行つた。

『私だつて、さうですとも……。その例に洩れやしませんよ。いつ、後尾しっぽを出すか

わかりやしませんよ』さつき女中が立つて行つてそこにゐないので政代に酌をして貰つて、『だから、言ふんです、家庭は、それは、本當でない、無意義だ……。本當につまらんとくろだ。場合に由つては、人間の魂を腐らせて了ふやうなところだよ言つても好い。しかし、いくらつまらんとくろでも、尠くとも、女の避難所としては、家庭でなくてはならない。家庭でなくては、女は落著いてゐられない。その周圍に集まつて来る男性を防ぐことが出来ない』

『いゝえ、それは出来ます』

かう中途を政代は遮つて言つた。

『まア、お聞きなさい。たとへ、出来ても、貴方のやうにならなければならぬ。それは貴方の心持はよくわかる。さつき言つた言葉でよくわかる。本當に生きたいために、家庭といふやうな避難所にかくれてゐずに、かうして狼の中に出て来てゐ

る心持はそれはよくわかる。一面では勇ましいことのやうにも思はないでもない……しかし、終局は、女は、矢張、家庭ですぜ。何うしてもそこに落ちて行かなければなりませんぜ。それは確だ、確なことだ……。あの妾だとか、圍者だとかいふものも、狼の襲撃に堪へないで、假に、家庭をつくつたと言へば言へる形ですからな」

『それはさうかも知れませんか。男の方から見れば、屹度、さういふ風に見えるに違ひありませんね。しかし、女の方から見ると、その狼は、煩い狼ではありませんけれども、怖い狼ではありませんものね。私なんかでも、だから家庭の避難所までつくつて、その中に遁れやうとは思ひませんわ……。中には、狼どころか、やさしい羊もゐれば、忠實な犬もゐるんですもの』

『ふむ、さうかな。女の方から言へば、さうかも知れない。ことに、貴方のやうな美しいマドモアゼルから言へば……。ふむ、成程、それはさうだらう。そこから、

かうした放浪の運命が生れて来たんだらう』かう點頭くやうに言つて、Kは盃の酒を呷るやうにした。政代はそれに酌をした。

これに盡きず、その夜はいろいろなことを話したことを政代は思ひ出した。Kは随分無遠慮な物の言ひ方をした。はつきりさうとは言はなかつたけれど、かの女の經て來てゐるやうな生活は、不健全で、不道德で、決して正しいものではないといふやうなところまで話を持つて行つた。『それで、貴女は子供のことを思ひ出しはしませんか』暫く黙つた後で、Kはかう言つて政代の顔を見た。

『別に、思ひ出しませんね』

さつきのやうに思出したことは、夫は傍にそつとして置いてかうかの女は平氣を

装つて見せた。

『思ひ出さないことはないでせう?』

『だつて、思ひ出したつて、しやうがありませんもの。さういふことは、もうちやんとこの時に覺悟して來てゐるんですから』

『それはさうだらうけれど、思ひ出さないつて言ふことはないと思ふがな……。いくら男を對象にして生きてゐる女でも、矢張、女は女なんだから……』

『だつて、私はかう思ひますもの。後悔する位ならしない方が好い。一旦さうと思つた以上、進みはするが、退きはしない……。これが私の主義なんですもの……』

『ぢや、貴方は主義で動いてゐるといふわけですか。いくら本能の要求が熾でも、主義のためにそこを押へることが出来るといふんですか?』

『さうぢやないわね……。さういふ風に單純ではないわね』政代は深く考へるやう

にして、『何と言ふたら好いか、ちよつと私の心持は言ひあらはしにくいけれど……
 ます、さうね、かう言へば好いわね、成るだけ、刹那的に物を考へるやうにしてゐると言つたら好いのね。だから子供のことなんか、考へることがあつたにしても、すぐ忘れて了ひますわ』

『ふむ成程、刹那的に物を考へる? さうかな、成ほどさう言へば好いのかも知れないな。つまり、始終、張詰めて、活躍してゐなければ承知が出来ないつていふことなんですな』

いくらか政代の心の真相に觸れたといふやうにして、Kは額に手を當て、深く考へるやうにした。『そしてそれは貴方の美貌といふことも密接な關係を持つてゐるわけですか?』

『それは、さうかも知れませんね。自分はよくわからないけども』

『ふむ』

Kはまた深く考へ込んだが『所謂、戀が生命といふ奴ですな。一體女は大抵そんなんだ。けども、しかし多くの女は家庭と子供のために縛られて、その本能を十分に發揮することが出来ないだ……。また、一面、その家庭と子供が、さうした女の戀を縛るために、この人生が旨く圓滿に治つて行くといふ形もあるんだ……。しかし、その中に、選れたると言つて好いか、それともまた捨てられたると言つて好いか、それに外れた女性があるんだ。貴方なんかその一人かも知れませんか』

『さうかも知れませんか』
かうした二人の話は、傍にゐる女中などには竟に解らなかつたやうに見えた。女が来て待つてゐる。そこに、一汽車おくれて男がやつて来る。唯、普通の構曳としか思つてゐなかつたのに、これはまた何といふ座敷だらう。何といふ光景だらう。

男も眞面目なれば、女も眞面目、互ひに議論めいたことばかり言ひ交して、話は容易に盡きようともしなかつた。女中は酒を取りに何邊となく階下へと下りて行つた。

小形の金時計をKは出して見てゐた。

『何時？ もう——』

『十二時五分钟前——』

『もうさうなる？ 早いわねえ。いつの間にさう時間が経つたんでせう。何うかしてるんぢやない、その時計？』

『そんなことはない』

かう言つて、Kは時計を帯の中に藏つた。かれもかなり酔つてゐるらしかつた。

政代は政代で、成るだけ盃は受けないやうに、受けても酒は飲まないやうにこれまでして来てゐたにはゐたけれども、しかも、いつの間にかそれとなしに酔つて了つたらしく、夥しくセンチメンタルな気分になつてゐるのがかの女自身にもわかつた。

さつき女中が階下に下りて行つた時、『だつて、私だつて、女ですもの、それは悲しいことはありませんとも——』かう言つてじつとKの顔に見入つた時のことを政代は思ひ出した。いつとなしに、また何といふ理由なしに、涙が體中に漲りわたつて来るやうなのをその時かの女は感じた。

Kも恐らく、かの女の眼に、一杯に、溢れ落ちるばかりに溜つて来てゐる涙を、見落しはしなかつたに相違なかつた。

『……………』

『……………』

かれ等は深いある感じに打たれたやうに、暫しの間、唯黙つて坐つてゐた。

『でも、ね、Kさん』やがてかう言ひ出した政代の聲は嗚咽のやうであつた。『これでもそんなにわるい女ぢやないんですよ。やさしい心持だつて持つてゐる女なんですよ。世間の人は、……………』かう言つて堪らなくなつたやうに涙の堰を破つて、『いろんなことを……………恰で莫連女か何かのやうに言ひますけども、皆な……………皆な……………誤解なんです……………。私は、私は……………そんな悪い女ぢやないんですから——』

『それはさうですとも!』
かうは言ひながらも、Kは思ひ迫つて来たといふやうに、涙の溢れ出して来るのを手で拂つて、『僕は……………僕は、決してさうは思つてやしませんよ。本當だとも……………貴女はわるい女ぢやない、決してわるい女ぢやない』
『でも……………世間では、世間では——』

涙に碍へられて、政代は十分にそれを言葉に移すことが出来なかつた。

『好いですよ……好いですよ……。世間なんか、何うでも好いちやありませんか。誤解したい奴には、誤解させて置くさ』

『私だつて、私だつて……そんな女ぢやないんです』かう政代はすすり上げた。

『まア、好い……。或は、或は』Kは言ひにくさうに、『僕もわるいことを言つたかも知れない。つひ、お心安立にまかせて、氣にさはるやうなことを言つたかも知れない——。もし、言つたら、謝さなければならぬ』

『いゝえ、そんなことぢやないんです』慌て、政代はそれを押へて、『貴方になんか何んと言はれたつて好い……。本當のことを言つて戴く方が好い……。貴方には、めてお逢ひした時から、さう思つてゐるんですから……』

『でも、失敬なことを大變言つた——』

『いゝえ、そんなことはないんです……。それで言つたんぢやないんです。唯かうして一人で、こんなところにまでさまよつて來てゐると思うと、堪らなく自分が可哀相になつて來たんですの……』かう言つて又悲しくなつて來たといふやうに右の手を眼に當てたが、それを再び放した時には、いくらか笑顔になつてゐるのをKは見た。

『まア。好う御座んさ。時間なんかいくら経つても……』

かうKはつとめて氣を落ち附かせるやうにして言つた。そこへ、女中は銚子を持つて入つて來た。

『ヤア、もう澤山だ。酒は！』

『でも、まア』

『それに、もう遅いんだからな。もう十二時だ。姐さんなんか迷惑だらうな、こんな、長く話し込んで……』

『いゝえ』

かう言つて、莞爾しながら女中はそこに坐つた。

『随分、いろんなことをよく饒舌りましたね！』

『本當ねえ』

かう政代はKに合せた。

『私なんか、丸でチンブンカンブン……。何を仰しやつてゐるんだか、何を話してゐらつしやるんだか、ちつともわかりませんでした……。』かう言つて女中は笑つて、『喧嘩でもなすつてゐらつしやるんぢやないかしらとも思ひましたよ』

『さうかね』

Kは笑つて、『何アにあれだつて皆な男と女の話さ』

『それはさうでせうけども、男と女の話はわかつてゐますけれど、何が何だかちつともわからないんだから不思議ですわね。矢張、學問のある方は、違ひますのね』女中は今更のやうに不思議な女を見るといふやうにして、じつと政代の方を見詰めた。

『矢張、男が女を口説くにしても、口説き方が違ふと言ふのかね？』

Kはかう言つて大きく笑つた。

『いゝえ、それは、さういふ話ぢや御座いますまいけれど……』

『ぢや、何ういふ話だつたと思ふね、君は？』

『それは、高尚な話か何かでしたらうけれど……』

「Kは笑ひ出して、

『高尚な話でも何でもないんだよ。ね、奥さん』わざとかう政代を呼びかけて、『矢張、男が女を口説いたり、女が男を口説いたりしたやうなもんですね？ さうですね』
『それもさうかもしれないのね』

「かう政代も笑つて見せた。

『まア、奥さん、いやだ。あんなことを仰有つて。それよりか、さつきなんか、何うかなすつたんぢやないかと思つて、ハラ／＼してゐましたよ』

『随分、大きな聲をしましたものねえ——』

『貴方だつて、むきになつて、何か言つてゐらつしやるんだもの』かう女中はKに向つて言つて、更に銚子を出して、『もう一つ、いかゞ。熱いのが出来ましたから……』

「ヤ、もうよす。酒はよす。何か、漬物か何かで、飯を食ふ……。少しお腹が減つて来た』

『まア、好いぢや御座いませんか』

『でも、もう酒はよす。本當に飯を持つて来て呉れ』政代の方を向いて、

『貴方は何う？』

『私も、もう、何だか酔つちまひましたの……。イヤに、センチメンタルになつて頭がぐらく／＼しますの……。』かう言つて政代は考へて、『私泣上戸かしら？』

『何うして？』

『だつて、何だか、悲しく、悲しくなつて、涙ばかり出て来るんですもの。本當に、しやうがないのね』

『興奮してゐるんですね、矢張……』

『餘程、飲んだのね、酒を……。私も、もうお茶の方が好いわ』

『かしこまりました。ぢや、お香の物か何かで、御飯ね』

かう言つて女中は立つて行つた。その姿の廊下に消えるを待つやうにして、Kはいきなり政代の手を把つた。そしてそれを堅く握つて振つた。政代も堅く握り返した。

その一夜を境にして、かの女の生活が全く異つた方向を取つたことを政代は思ひ出した。内地に歸るべき筈であつたかの女がそのままそこにある期間滞在しなければならぬ身となつたのであつた。

『ぢや、さうしてお呉れ。是非、大連に行つてこなければならぬ用事がまだ澤山

あるんだから……。その用がすんだら、京城と一緒に何ういふ風にもするから……』

かうKが言つたに對して、政代は、

『え、よう御座んすとも。いつまでも此處に待つてゐますとも。唯さびしいから一週間に一度位來て下さるわね』

『それは來る……』

かう言つて、そのあくる日、朝の九時の汽車で、Kは大連に向けて立つて行つた。その時、政代は見送りに停車場に行つたが——停車場の驛長や助役は不思議な顔をしてかの女を見てゐたが、しかも、かの女は平氣な顔をしてKと並んで歩いて行つた。否そればかりではなかつた。さながら長い間の旦那でもあるかのやうに、身のまはりのこと注意したり、途中のことを氣づかつたり、プラットホーム迄出て行

つて、をりからやつて來た汽車の窓のところはその明るい美しい顔を見せたりなどした。

汽車が動き出した時、

『ぢや、來週の火曜ね？』

かう言つて、そこに立つて、やがて動き出して行く汽車の窓のところいつまでもくく白く見えてゐるKの顔を遠く見送つた。

歸りは、矢張、Kを見送りに行つた若い方の女中と一緒に旅舎の方へと歸つて來た。昨夜通つた時とは違つて、路もさう大してわるくなく、滿洲の曠野もそれほどさびしくなく、旅舎もそれほど遠くないのをかの女は見た。

かの女は元氣が好かつた。並んで歩いてゐる女中を捉へて、少し長く滞在してゐなければならなくなつた話などをした。

女中はちよつと驚いたやうにして、

『ぢや、東京の方へは、當分お歸りにならないのですか？』

『いゝえ、歸るには歸るんですけどもね、少しばかり、用事が出來たもんだから……。此處に暫くゐて、その用事の成行を見て行かなければならなくなつたもんだから……』

『さやうですか。それは好う御座んすね。賑やかになつて……』

『また、いろくお世話にならなかりやならないんですよ』

『いゝえ、どう致しまして……。今は静かですから、御滞在には好う御座いますわ』
Kが言置いて行つたと見えて、やがて政代は二階の一室から、ちよつと外へは見えないやうな瀟洒な六疊の離座敷の方に伴れられて行つた。そこには、松や檜の間に巧に石をあしらつた小さな庭があつて、午前の日影が山茶花の紅く白く咲いてゐ

るのを明るく印象的に、あたりに際立たせてゐるのを政代は目にした。

『好い室があるのね。外から見ても、こんな離れがあるとはちよつと思へないわね』

『さうでせう。此處ならちよつと好いでせう、奥さんなんかのゐるのには、持つて来いつていふ室でせう？』案内して来た年を取つた方の女中は、こんなことを言つて笑つた。

『さうね、好いのね』

『此處なら、表の方の客とは、丸で離れてゐますから……』こんなことを言つて、女中はかの女の身のまはりのものなの、茶器だの、火鉢だのを其處に運んで来た。

政代は靜かに日を送つた。幸に天氣は好く、空は美しく碧に晴れて、内地で言へ

ば、小春日和といふやうな好い日が續いた。庭の隅に葉は霜に枯れて、花だけ黄く咲き残つてゐる菊の花などがあつたが、それを見ても、東京の郊外のことなどが思ひ出された。

次第に、この旅舎の内部のさまなども政代にはわかつて来た。主人と言ふのは、京都あたりのある町の大きな旅舎の次男で、ちやんと妻子もある身であつたが、その頃大阪の北の新地で棲を取つてゐた今の上さんと深くなつて、それでそつちは投り出してこの滿洲の地へとやつて来たといふことであつた。その上さんは、もう四十を越してゐるので、さう際立つて美しいといふ風ではなかつたけれども。――

わざと地味にしてゐるので、さうした昔の稼業のあとにはつきりとは残つてゐなかつたけれども、夫でも、さう聞いて見ると、何處かに艶な、如才のない、言ひ廻しの旨いところがあつた。年を取つた方の女中の言ふところによると、此處にこの旅

舎を始めた頃には、その經營も樂ではなかつた上に、内地からの引戻し運動が熾んだつたので、上さんも並大抵の苦勞ではなかつたといふことであつた。それを何うやら斯うやら、これまでにして、旦那にも内地に思ひを残させないやうにしたのは、全く上さんの辛抱強い、熱心な眞情の結果であるといふことであつた。『何でも、さうで御座いますけれど、辛抱が肝心で御座いますねえ。男と女の中などでも、好い時ばかり好くつて、わるい時はすぐ離れて了ふやうでは、それでは際限が御座いませんから、いつまで行つたつて身の固まる時が御座いませんから』その女中は、こんなことを言つて、心からそれを自分の閱歷にも當筈めたかのやうにして、その上さんの眞情がその旦那をこの地に引き留めた話をした。

『私など知りませんけども、一時は、内地に歸ると言つて、何うしても旦那は言ふことをきかなかつたさうですから。それはその筈です。内地には、奥さんも子供もあるんですからね……。それを、あのお上さんは、眞情一つで引留めたのださうです』

『でもそんな風なところは、ちつとも見えないぢやないの？』
『今ではさうで御座いますけれど、あれで五六年前までは、中々さうぢやなかつたんださうですよ』

こればかりではなしに、後には、その上さんの話に雜せて、自分の經て來た男の話などをその女中はした。お増と呼ばれたその女中は、随分いろ／＼なことをして來てゐるらしかつた。今でも、ある男からつけ覗はれてゐるために、そのためにこの滿洲まで落延びて身を隠してゐるらしかつた。

『男に執念深く追ひ廻される位恐ろしいものは御座いませんね』こんなことを言ふのをきくと、もう四十を越したかと思はれる年でまたさう大して美しいとも思はれ

ない容色で、さうしたことを言つてゐるのが可笑しいやうにも、不思議のやうにも思はれた。何處に行つても、色戀の世の中だ。また、何處まで行つても男と女の仲の話だ……。かう政代は思はずにはゐられなかつた。と、今度は、その山形生れだといふ若い方のお雪といふ女中のことが思ひ出されて來た。それも矢張、男のことで、この遠い滿洲までやつて來てゐるのではないか。今でも、内地にゐるその男から一月に一度か二度やつて來る手紙を唯一の樂みにしてかうして働いてゐるのではないか。かう思ふと、政代は不思議な氣がした。自分も矢張その群の一人で、知らずに異郷に彷徨つてゐるのではないかといふやうな氣がした。

ある時は、その若い方の女中のお雪が、その男にやる返事の手紙を書いて貰ひに

政代の許にやつて來た。しかしお雪とて、丸きり字が書けないのでもなかつたけれど、いつもは自分で書いてやつてゐただけけれど、その時は、それ以上に、その話も聞いて貰ひたかつたし、それについての政代の判断も聞かして貰ひたかつたので、それでわざ／＼やつて來たのであつた。お雪はかなり詳しい話をした。

『でも、その女の方に、男の心は行つてゐるんぢやないのかね？』
かう政代が言ふと、

『いえそんなことは決してないんです。そんな人ぢやないんですから……。何年離れてゐても、二人の仲は壊れないやうにちゃんと成つてゐるんですから……。その女は何でもないんです』

『でも、お前さんの話をきいて、此手紙を読んで見ると、何だかさういふ氣がするけどもね……。それは、此方を思つてゐるやうには書いてあるわね。しかし、とて

も、自分は駄目だ……もう何も彼も出来ない……。その心の打撃のために、何もする氣が出て来ない。かういふ風に書いてあるわね。それがをかしいと私は思ふんだけども……』

『それは大丈夫なんです。一體氣の弱い人なんですから……』政代の言つたやうにさういふ風にきめて了はれるのを何よりも恐れるといふやうに、また、さうきめられて了つては、折角縫つてゐた力綱をブツリと根元から切られたと同じだといふやうに、お雪は容易にそれを承認しやうとはしなかつた。

『それで、金は度々送つたの？』政代はかう改めて訊いて見た。

『何うせ、こんなにしてゐるんですから、思つたやうなことは出来はしないのですけれど……』さうしたお雪の口裏には、自分の力一杯だけには、金も送つてゐるといふ形が歴々とあらはれて見えてゐた。否、給金などを、つとめて貯蓄して、ある

額にまとめては、絶えず内地の男の許へ送つてやつてゐるらしいことも、話をきいてゐる中に、次第に此方に飲み込めて来た。政代には滅多なことと言へなくなつた。その男の喰物になつてゐながら、そのために、かうした異郷に漂泊する身となつてゐながら、しかもその男を憎むことが出来ず、また離れることも出来ない女のことを考へると、單に普通に面白さうに笑つたり、冷靜に判断したりすることはかの女には出来なくなつた。政代はお雪の顔を凝と見詰めた。

『さうね……。何うしても、さういふ風になるものね。何方かで思ふと一方はその反對に、冷靜になつて行くものね。だから惚れた方の身になると、随分辛いものね……。しかし、またかういふところがあるにはあるわね。此方で思つてゐるんだから、眞面目な、本當なところは何うしても此方にあるといふ處はあるわね。その證據には、色戀は惚れられるよりも惚れる方が好いツて言ふからね。熱心になれるだ

「けれども、惚れた方が好いのかも知れないからね」後には政代はこんなことを言つた。

お雪は書いて貰つた手紙の禮を言つたあとで、

『でも、もう一年すれば、何うせ歸るには歸るんですから……』

『さうね、離れてゐて、いくら思つたつて無駄ね。其時までは、落附いて働いてゐる方が好いのね。歸つてから、何うにでもなるもの……』

『本當ですよ、奥さん』

かう言つたお雪の眼には、涙が溢れさうになつてゐた。政代もつひ誘はれて何となく悲しくなつて來るやうな氣がした。

一室に閉ぢ籠つたり、温泉に入つたりばかりしてもゐられないので、天氣の好い日などには、そこらをぶら／＼歩いて見たりすることもあつた。ある時は、停車場を通り越して、すつと向うに、支那の民家が楊柳の中に隠見して見えるあたりまで行つた。またある時はそれとは全然反對な方向を取つて北へ／＼と歩いて行つて見ることもあつた。始めはそれと氣が附かなかつたが、次第に駱駝の脊を並べたやうな山が、碧い空にレリイフか何ぞの様に浮き出して連互してゐるのが目に付き出した。

『面白い山ね?』

かうある時お雪に言ふと、

『あれが鞍山といふ山ですつて……。今、あそこに、大變、金屬の出る鑛山が見附かつたんですつて……』

「あゝ、あれが鞍山……」始めてそれと氣附いた驚きをかくすことが出来ずに、「ぢや、遼陽はあの向うね？。すぐね？」

「さうださうで御座います」

「日露戦争の古戦場ね。さう？。あれが鞍山！」

かう言つて政代はあらためてその面白い形をした山の姿を眺めた。

ある時、さうした散歩から歸つて來た時には、政代はまたかうお雪に言つた。

「お前さん、此間、鞍山に鑛山があるつて言つたね？」

「えゝ」

「その鑛山はもう始めてるの？」

「まだ、始まつてはゐないんでせう。その中始めるには始めるんでせうけれど——」

「でも、今洋服を着た技師らしい人が、二三人其方へ歩いて行つたが、その話ぶり

では、何でも、鑛山はもう始まつてゐるやうなことを言つてたよ」

「始まつてゐるのかも知れませんが、それぢや——」

「やつてゐるのは、A組？」

「いゝえ、たしか、K組だと思ひます。何でも、その大株主になる人だの、理事だの、技師だのが、東京から近々に視察に來るツていふ話です。何でも、それがすんでから始めるといふやうな話でしたが——」

「遠いの？。その鑛山のあるところは？」

「私は行つたことは御座いませんから、よくは存じませんが、何でもちぎだといふことで御座いますよ。これから、少し行くと川が御座いますがね」

「あゝ、川がある……」

「御存じですか……。もう、あんなところまで行らしたんですか？」

『傍まではまだ行つて見ないけども、遠くに見えてゐたから……。水は少いけど、かなり大きな川らしいのね?』

『え、水が出ると、なんでも怖い川なんですの。で、その川をわたつて、少し行くと鞍山といふ村があります。そしてその村の外れに大きな昔の關所見たいなところがあります。そこまでは私も行つて見ました。何でも、そこから、その鑛山の事務所まで十町位しかないといふ話でした。わけはないんでせう、屹度——』

『大抵は汽車ですぐ大連までお歸りになるのが多う御座いますけれども、それでも中には泊つていらつしやる方も御座います』

政代はさつき散歩に行つた時、その水の少い川をわたつて此方へ歩いて来る技師の一行らしい群に出會つたことを思ひ出した。

不思議にも、その洋服の人達がかの女には氣になつたのである。現に、その中の一人である四十位の鼠色の中折をかぶつた男は、何處かで一度逢つたか、または話をしたかに相違ない氣がしたのである。勿論、いくら考へても、それはつひに思ひ出せはしなかつたけれども……。

その時、かの女は午後の明るい日影を後にして、此方へ此方へと次第に近寄つて来るその人達を見てゐた。その人達は、川に橋がないので、靴を脱いだり靴下を取つたりして、漸くに徒渉をしてやつて來たのであつたが、此方の岸につくと、その少しのぼりになつたところに来て、また、元のやうに靴を穿いたり何かしたりしてそして煙草を吸ひながら、段々此方へとやつて來た。

さうした洋服姿や、中折帽が此方にもなつかしかつたと同じやうに、その人達にも、そこにぼつねんとひとり立つてゐる女が、めづらしく不思議であつたに相違なかつた。

しかし、平氣でかの女は、一番先に歩いて来る、その人達の中では比較的若い男に此方から聲かけた。

『鑛山から来たんですか？』

『えゝさうです』

かうその男は答へた。

『もう、その鑛山は、仕事を始めてゐるんですか？』

『……………？』

今度は答へずに、いくらか怪しむやうに、じろく／＼とその男はかの女の顔を見た。

しかしそれは長い間ではなかつた。やがてあとから、顔のくしやくしやくした男と、この一行の長であるらしい肥つた莞爾した中年の男とがやつて来た。

かの女は今度はその問ひをその肥つた男の方に向けた。

『え、始めてます…………』

かう莞爾しながらその男は言つた。その時、かの女はそのあとからぞろ／＼つゞいてやつて来た二三四人の群の中に、その鼠色の中折をかぶつた四十男を發見したのである。たしかに何處かで見た眼、しかもかなり深くかの女の祕密を知つてゐるやうな氣持のする眼を發見したのである。急に、かの女はさういふ風に、無遠慮に滿洲の曠野であるのに安心して、いつもの警戒もせず、づか／＼話をしかけたことを悔ゐた。

しかし、一度話しかけた上は、そのまま素氣なく此方から離れて来るわけにも行

かなかつた。ことに、その肥つた男は、莞爾しながら、頻りになつかしさをうにかの女に話し懸けた。

『あ、さうですか、温泉ですか。今は込んでゐますか』
 こんな風にその肥つた男は話した。

『貴方がたも、矢張、温泉にお泊りでせう？』

『いや、私達は——』かう言つて笑つて、『これから、大連まで歸るんです』
 『これから？』

わざと驚いたやうに政代が言ふと、

『なアに、わけはありませんよ。今度の汽車で行けば、夜の九時には歸れますよ』
 で、いろ／＼な話をしながら、政代はその人達と一緒に温泉のところまで戻つて來た。しかもその間、その四十男はじろ／＼と頻りに此方を見てゐるばかりで——ま

た氣味わるく笑顔を此方に向けたり何かしてゐるばかりで、つひに一言も言はなかつた。

(オヤ！)

と思つた。政代は體中が俄に熱くなつて來るやうなを感じた。

たしかにそれはNに相違なかつた。無論それはその横顔をちよつと見ただけに過ぎなかつたのであるけれども——此方は厠から扉を押して出る、向ふは湯殿に向つて、もう一人の伴れの紳士と何か頻りに笑ひながら歩いて行く、その横顔をちらりと見たばかりであつたから、此方を見ても、向うは知らなかつたに相違なかつたけれど、しかしNが此處に來てゐるといふことは、かの女に取つて、かなりに大きな事

件であらねばならなかつた。それに、此處にNが來てゐるといふことも、決してあり得べからざる不自然なことでもなかつた。さつき女中のお雪からその鑛山にK組が關係してゐるといふ話をきいた時から、既にそのNのことはかの女の胸の中に微かに思ひ出されて來つゝあつたのであつた。

『あ、わかつた。昨日、あそこで逢つた中年の男は、Nの親類になるT子爵の家に使はれてゐた男だ……。あゝさうだ。確にさうだ。』

長い廊下を此方に歩いて來ながらかう政代は思ひ出した。(あゝそれでだ。それで、かうした鑛山にやつて來てゐるんだ——)かうかの女は猶思ひ續けた。しかし、一方では、その男なら、かの女の祕密を知つてゐるにしても、さう大して怖るゝに足らないといふやうな氣がして、いくらか安心した。

室に歸つてから、その儘政代は柱の電鈴を押した。やがてお増がやつて來た。

『ちよつと宿帳を見せて貰へない?』

かう政代は言つた。

『何うかなすつたんですか?』

『いゝえ、何でもないんだけど、知つてゐる人が、この一週間前ほどに此處に來てゐたといふ話だから……。』

お増はやがて宿帳を持つて來た。

しかし、それにはまだN達の名はついてなかつた。かの女やKが名をつけてから、まだ一人か二人しかついてゐなかつた。人知れずこつそりそれを確めようとしたかの女の目的は、これで見事に外れて了つた。

宿帳を返しながら、

『今日お客があつたね?』

「え、御座いました」

「鑛山の人？」

「え、鑛山の重役か何かださうで御座います。何でも一人は華族さまだつて言ふこととです。N男爵とか仰しやいました」

「さう——」

果してさうであつた。政代は半は困り、半は惑つた。何うしたら好いか自分にもわからないやうな氣がした。何うかして面を合はせたくないとい方には思ふと共に一方には逢はずにもおられないやうな氣が熾に起つて來た。

體が熱くなつたり冷たくなつたりした。(Kに逢はない以前ならば——これならば逢つたつて構はなかつたけれども)こんな風にも政代は考へた。

それにしてはかうしたところでNに逢はうとは？ 皮肉にもNと逢はうとは？

かう思ふと政代にはいろ／＼な過ぎ去つた事が何う押へて好いかわからないほどに混亂して、かの女の頭に押寄せて來た。かの女には、これも皆、神の審判ではないか、ひとり手にかうなつて來る自分の運命ではないかといふやうに思はれて來た。否そればかりではなかつた。Kの體がかの女の體に生々と蘇つて來るのをすら政代は感じた。

つとめてNに逢はないやうに心懸けたけれども、またつとめて離座敷から外に出ないやうにしてゐたけれども、しかも、かの女の心の一面に逢つて見たいといふ要求がかなり強く押寄せて來てゐるので、遂には顔を合はせなければならぬやうな時が次第に近寄つて來た。

その翌日には、N達は鑛山の方に朝早くから出かけて行つて、午後になつてもまだ歸つて来てゐなかつた。その間に、かの女は大連のKの許に電話を懸けた。

Kはすぐ出て來た。

『あなた、いつ入らつしやる？』

『さア、まだ用事がちよつと片附かないけれども、その中、行くよ』

『その中では困るのよ』

『もう、あきたのかね？』

『あきやしませんけどもね、いつまでも此處にゐたくはないんですの！ 今度、來たら、すぐ京城の方へ伴れて行つて下さらない？』

『大變急だね！ 約束と違ふぢやないか。何かさうしなければならぬことでも起つたのかね』

『いゝえ、さうぢやありませんけれどもね、何うせ、行くなら、早く伴れて行つて戴く方が好いと思つて……。用事はまだ中々すまない？』

『京城に行く段取には、まだ中々いかないね……。』少時途切れて、『兎に角今日は駄目だけれど、明日の晩か、明後日の晩かに行つていろ／＼よく話しをするよ。何にも、そんなに急な用事が起つたんでもないんだらうから？』

『それは起りはしませんけどね。女はひとりであるのは、さびしいものですよ。そのさびしいといふことから、いろ／＼なことが起つて來るんですからね』

『わかつた、わかつた……。』Kは大きく笑つて、『ぢや、成るだけ、明日の晩行くやうにするよ』

『さう——？』

かう言つて電話を切つて、政代はその狭い室から出て來た。政代はかの女自身に

も自分の心が、自分のやつてゐることが、考へてゐることが、はつきりそれと掴めないやうな氣がした。Nにも逢ひたい。逢はずに此處を去つて了ふことは何うしても出来さうにもない。それでゐながら、Kの許に電話をかける。早く京城に件れて行つて呉れと頼む……。何方が本當だらう。何方が虚偽だらう。かう考へて見てもかの女自身にもはつきりそれとわからなかつた。何方も本當の心持のやうな氣がした。

政代はNとわかれた時のことを考へた。それはNにも無論責任があつたには相違なかつたけれども、しかもその原因の八分は彼女の責任であつたのであつた。その時に限らず、さうした場合には、かの女はいつも勝利者となることを望んだ。——向うから捨てられる前に此方から捨てゝやる——さういふ心持を抱いて、いつも男からわかれて來たのであつた。Nとわかれたのも矢張さうであつたことを政代は思

ひ出さずにはゐられなかつた。そしてさういふ風にして別れて來た澤山の戀心の連珠を、何ういふ風にかの女は取扱つたかと言ふのに、矢張かの女はいつも勝利の悲哀に似たそのさびしさを心の中に絶えず發見して、苦しく煩悶したり懊惱したりしたのであつた。Nなどは殊にその中でもすぐれて色彩の濃かな方であつたのである。政代は何うして好いかわからないやうな氣がした。

此方から笑顔を見せて、靜かに其方に歩いて行くと、その、廊下に立つてゐたNは、始めはその眼を信じないといふやうに、じつと此方を見てゐたが、

『これは……』

と言つてそのまま、此方へと走るやうにして寄つて來た。政代は心持ち顔を赧くしたといふやうな風で、

『めづらしいのね……。こんなところでお目にかゝらうとは思ひませんでしたね』

『本當だね……。一體何うしたツて言ふんだな。君が此方に來てゐるなんて、夢にも知らなかつたからね』

じつと政代の顔や扮装を索るやうにして見て、

『一目見て、君に違ひないと思つたけれども……。さて、この滿洲に君がゐる譯はないと思つてね。これは奇遇だ……。小説以上だ……。それにしても、僕のあることがよくわかつた』

『昨日から知つてゐるのよ……。』

かう言つて政代は笑ひ續けた。

『ぢや、さう言つて呉れれば好いの……。それにしても何うして知つてゐたんだえ？。宿帳でも見たのかえ？……。あゝさうか、昨日湯に入るところを見たのかえ？。ああさう云へば、あの時便所から出て來た女があつたにはあつた。それは知つてゐ

る。しかし、それは君だとは思はなかつたね。何しろ奇遇だ……。逢ふにも、かゝしたところで逢はうとはねえ？。』

『本當ね』

政代の方でも、Nの顔やら姿やらをじつと見つめずにはゐられなかつた。

『變りませんね、貴方は？』

『いや、君だつて變らない……。益々若いぢやないか？。』

『駄目ですよ、もう——』

かう言つて政代は笑つた。

『それにしても、此處には、いつ來たんだね。』

『もう五六日になるわ』

『滿洲には？』

『いつちには、もう半年以上來てますわ。つひ此間まで北京に行つてゐたんですけども……』

『北京に——？』

Nは驚いたやうにして、『いよいよ、世界を股にかけるわけだね？』

『股にも掛ませんが……』政代は少しツンとして、『だつて、内地にゐたツて誰も相手にして呉れないんですもの。評判ばかりわるくつて……』

『そんなことはないだらうけれど……』かうNは言つて、『夫にしても何うしたね？あの代議士は？』

存外鋭い質問である。

『知りませんね……』

『だつて、大分評判だつたちやないか。僕もかげながら、君のやり口の鋭いのに感

心してゐたんだよ』

『まア、好いのも、そんなことは。だから、評判がわるくつて、内地にゐられないツて言つてゐるんですもの』急に政代の方から逆襲するやうに、『それは、さうと、何うなすつて？ 梅勇さん？』

『相變らず丈夫だよ』

『結構ですね。いつも、若くつて美しいでせうね？』

『ヤ、もう、随分、婆になつたね。もう白髪が出て來たさうだ』

『結構ぢやありませんか？ 共白髪なら？』

『まア、餘り結構でもないな。御存じの通りの女だからね』

こんなことを言つてNは笑つた。他が聞いては、何の意味もないやうなことの申にも、遠い昔の追憶や、嫉妬や、争鬭やがかくされてあるのであつた。一言言つた

丈けでも、昔の二人の生活とその生活を取巻いた女や男のことが歴々とそこに浮び出して来た。

Nの胸には、一番先に、政代が縋つて、此處にやつて来た男のことが上つて来た。屹度さういふ男があるに相違なかつた。またさうした保護者なしに、かうした滿洲

の土地にかの女がやつて来るとは何うしても思へなかつた。Nは笑ひながら、

『それにしても何うしてこんなとこにやつて来たんだね？』

『何うしてつて、別に理由はないわ。矢張内地にゐられなくなつて、さうしてかういふところにまで落ちて来たのかも知れないわね』

『長く此方にゐるのかね？』

『さうねえ……』

政代は考へるやうにして『何うなるかまだわかりませんね。此間なんか、もう東

京に歸るつもりでゐたんですけども、また、ちよつと歸れなくなつた——』すぐ折返して、『貴方は？』

『僕かね？ 僕は、ぢき歸るよ。何しろ、唯、形式に鑛山を視察に来たばかりなんだから……』

『お伴れがあるんでせう？』

『あつても、技師だよ』

『でも、まだ二三日は此處にゐるんですか？』

『さうだね……。まだ少し用があるね。それも僕の方にあるんぢやないがね、技師にあるんだがね』

『有望なの？ その鑛山？』

『まだ、はつきりはわからんがね。滿更でもないやうだな。何しろ、鑛床がかなり

に深いやうだ』

『儲かつたら、私にも、澤山わけて下さるわね？』

かう軽い調子で政代が言ふと、

『それはやるとも……。何しろ、君だもの、他人ぢやないんだもの』
大きくNは笑つた。

しかし、かうした軽い調子は、いくら年月が経つてゐたにしても、またいかに他人になりかけてゐたにしても、何となくかれ等の心持にそぐはなかつた。かれ等は種々なことを思ひ出すやうにして黙つて了つた。

『妙子さん、もう、成長くおんななすつたでせうね』

つとめてその沈黙を破るやうにして政代は言つた。

『何しろ、もう女學校だからね！』

『もう、さうおなりにたりますかね？ あの時分まだ七歳か八歳でしたのに……。

早いもんですね。お美しくおなりになつたでせうね？』

『駄目だね。成長くになると、段々とわるくなるよ』

『そんなことはないでせう』

今になつても、『奥さんは？』と訊く氣には何うしてもならないのを政代は發見した。競争者！ あの怖ろしい嫉妬！ 表面は無邪氣な顔をして、心は恐ろしい怨恨と陰謀、離れて了へば他人の筈であるのに拘らず、今でも歴々とその時のことが思ひ出されて來るのであつた。それにしても、今頃は、あの細君は何と思つてゐるだらう。かういふ遠い滿洲の温泉場の暗い廊下で、かれとかの女とかうして立話をしてゐるなど、は夢にも思つてゐないだらう。否、この光景を一目でも見たならば、かうした何でもない單純な會話を交はしてゐるだけでも、忽ち恐ろしい嫉妬の炎を燃

やすであらう。かう思ふと、政代は何となくをかしいやうな氣がして來た。それに引かへてNはまたしても政代の相手が氣になるやうに——しかもそれをちかに訊ねるのも巧くないといふやうに、黙つて意味のある笑ひを含ませながら、捜すやうに、政代の顔を、眼を、腫を凝視した。

Nはそれとはつきり口に出しては言はなかつたけれども、かの女の保護者についていろ／＼と暗中摸索をやつたことや、出来ることなら、もう一度その關係を新にしたいといふ心持が十分にあることや、此方に少しでも隙があれば、すぐ飛び込んで來るやうな形のあることなどが、その廊下の會合で歴々と政代にわかつて來た。政代は困つたやうな心持を一面に感ずると同時に、一面得意になつたやうな氣分の

漲りわたつて來るのを感じた。

大連からKがやつて來るといふ電話がかゝつて來た時には、Nは用事があつて、その鞍山の鑛山の事務所の方へ行つてゐる留守であつた。

Kは八時の汽車でやつて來た。

室に入つて、洋服を着物に着替へると同時に、Kは女中のお増に言つた。

『此處に、此間から、N男爵が來てるね？』

『え、來てゐらつしやいます』

『技師と二人で？』

『もう一人若いおつきらしい方と三人で來てゐらつしやいます』

『今ゐる？』

『いえ、今日は午後から山の方へゐらつして、ことに由ると、事務所へ泊るやう

になるかも知れないつていふやうなお話でした』

かう言ひながら、お増はをりをり眼を政代の方にやつた。政代は黙つて眼を下に低頭加減に困つたやうにしてゐた。

しかしそれほんのも僅の間であつた。

『貴方、お存じ？ Nさん？』

かう急に政代は言つた。

Kは此方を向いて、

『知つてゐるつて、さう深くも懇意にはしてゐないけれど、商賣上のことで、二三度取引したことはある』かう言つて、政代の顔をじつと見るやうにして、『君も知つてるのか』

『え、一寸知つてますの……』

政代は顔の色も變へずに一々軽く言つて、『昨日、ひよつくり廊下で出會して、びつくりしちやつたの……。向うだつて、私が此滿洲になんかゐるとは思ひもかけないでせう？ じつと立つて不思議さうにして見てるぢやないの……』

『さうでしたつてね、あちらでも奇遇だ。本當に奇遇だなんて言つてゐらつしやいしましたよ』

かう傍からお増も合せた。

『何處で知つてゐるんだね？ こつちでかね？』

かうKは訊ねた。

『いゝえ、東京で知つてゐるんですの……。それももう餘程前のことですの、もう七八年前ですの』

『ふむ』

とKは考へるやうにして、暫し黙つてゐたが、『それは本當に奇遇だ。僕も君が男爵に懇意だつたとは少しも知らなかつた……』

『何しろ、もう舊いことですからね』政代はいつもと變らない、落附いた調子で、『私のお友達のお友達の兄さんでしたの。だから本當にびつくりしました。ちよつとはお互ひによくわからなかつたんですもの。まア、何うして、こんなところに來てゐるんだなんて——人間つていふものは、何處で、何んな人に逢ふか、本當にわからんもんですね』

『本當で御座いますね』

またお増はかう傍から口を添へた。Kは黙つてじつと政代の顔を見詰めた。

女中が去つたあとで、Kはいくらかその話を突込んだ方へ持つて行つた。

『いゝえ、さういふ關係ぢやないんですの……。唯、お友達のお友達の兄さんとして知つてゐただけですの。Nさんの妹といふ人が派手な、社交好きな方だつたもんですから、芝居だとか、音樂會だとかいふ時によく一緒にになりましたの』

かう平氣で政代は言つて、

『もう随分昔ね。あの時分のことを考へると、何だか自分が丸で別な人間の様に思はれますね……』

『Sさんの許から出て來てからは來てからなんだね？』

『それはさうですとも……。Sの許に行つたのは私は十七で、二人子供を残して出て來たのが二十一の時だつたんですもの……』

『さうかな、そんなに早く出て來たのかな』つひわき道に引き込まれるやうに、『そ

れで、一番の子供は、いくつの時に出来たんだね？」

『十九の春に出来て、二十の秋にまた出来たんですもの……。つくづく子供を生ませられるつていふことがイヤになつて了つたんですね』考へるやうにして、『それも無理はないと思ひますの……。何しろ、まだ、ほんの娘ですもの。小説なんかばかり讀んで、戀とは美しいものだなど、空想してゐたんですもの……。ですから、子供なんか、丸で私には見られやしなかつたんですね。つまり、SやSの親達に取つても大變なお嫁さんだつたんですよ』

『ふむ』

Kは首を傾けて考へて、『それからあの代議士の世話になるやうになつたのかね？』

『いゝえ、それはずつと後ですよ。此方にやつて来る少し前ですもの。それに、あ

のことは、世間ではいろんなことを言ふけれども、何でもありませんよ。今になつて見ると、却つてあの人も氣の毒だと思ふ位ですもの。何しろ、あの時分は、私も随分わからずやでしたからね……。それに雑誌記者なんかにもおだてられたんですよ』

またわき道に引張り込まれさうになるのを辛うじてKは押へて、

『それで、あのN男爵とは何年位交際してゐたね？』

『交際つていふほどではないんです。唯時々あちこちで逢ふ位のもんでしたけども……。それでも、二三年さうしてゐましたかね？』(ぢや大丈夫だね?) かうKはそのまゝ突込んで行きたかつたけれども——またさうした言葉が口まで出かゝつて来たけれども、しかもあまり深く入つて行くのは、何だか男の寛大を失つて了ふやうな氣もしたし、餘り疑惑深いのを見透される様な氣もしたので、全く外れて、『そ

れにしても、N男爵が君を知つてゐようなどは、夢にも思はなかつたね……』

『さうでせうね。……私にしても随分奇遇でしたもの』

すぐ言葉をついで、『矢張、銅か何かの取り引き?』

『いや、それとも違ふんだがね』

『鑛山のこと?』

『いや、それはちよつと君にもわからんことだよ。……あれで、あの人、滿洲では随分いろんなことに手を出してゐる方だからね』

『評判は何う?』

『さアね』Kは少し躊躇して、『わるく言ふ人もあるにはあるね』

『まだ、何ういふ用が残つてゐるの? 大連に?』

その夜、寢る時、かう政代は笑ひながらKに訊いた。

『まだ、いろんな用事が残つてゐるんだよ。何うしても、僕がゐなくては駄目なんだから、いやになつて了ふね……』

『さうぢやないんでせう。他にわけがあるんでせう?』

わざとはつきり言はずに、中途でよして笑ひかけると、Kは、

『わけなんかありやしないよ』

『何うだか?』

『ぢや、何ういふわけがあるんだえ? 言つて御覽?』

『其處に、家庭にばかりこびついてゐるもんぢやありませんよ』

『これは驚いた!』

Kはわざと驚いたやうにして、

『僕の家庭なんか、さつぱりしたもんだよ。こびりつきたくつたつて、つきやうのないやうな家庭だからね……。君だつて、知つてゐるぢやないか、僕の唄は——？』

『知つてゐますとも……。でも、あゝ見えてゐて、あれで、中々亭主奉行だと思ふわ。私……』考へて、『さうぢやないでせうか？』

『そんなことはないよ。その方はさつぱりしたもんだよ』

『さうかしら？ 私、一度、お目にかゝつたきりだけれども、さうは思はない。随分妬く方ぢやないかしらと思ひますね』

『まア、好いさ、そんなことは——？』

いくらか面倒臭いといふやうに投げ出すやうにKは言つた。

『でもね……？』

政代は猶もその話を捨てずに、くぢくしてゐるので

『本當だよ。僕の唄なんかそんな嫉妬やきぢやないよ。それに、君だつて、君の利那的な主義から言つて、そんなことは問題にしない筈ぢやないか』

『でも、さうはいきませんよ。女は矢張女ですからね。かういふことに貴方となれば、何うしたつて、奥さんの影が色濃く私に映つて來るわけですからね』

『さうかな』

『然し、何うでも好いわ……。』今度は政代の方が投出すやうにしたが、さてまた黙つて考へ込むやうにして、『しかし、矢張男には女の心持は本當にわかりませぬのね。男は女を自分のものにしさへすれば、それで平氣で好いと思つてゐるのね。もう自分のものだ！』と言ふやうな顔をして、すぐ女を手に入れない前のやうな熱烈な愛情はなくなつて了つてゐるのね……。だから、女を本當につかむことが出來ないのね』

『それはさうかも知れんな』それでもKは猶面倒臭さうにして、『しかしまあ、そんなことは、何うでも好いちやないか？』

『何うでも好いの？ 本當に何うでも好いの？ 貴方？ 自分の持つたと思つた女がいつの間にか手の指の間から滑つて落ちて行つて了つても？』

それまでKは夜着の中に仰向に寝てゐたが、これをきくとすぐ起き返つて、

『それは何ういふことだえ？』

『別に、何でもないけれども……。たとへて見れば、私と貴方でも、折角かういふことになつても、貴方が本當に私のことを思つて呉れず、京城にも伴れて行つて呉れず、かういふところに投げ放しにして置けば、どうしたつて、一度得たその獲物も指の間から滑つて落ちて行つて了ふぢやありませんか。……一步を譲つて、さうして落ちて行かなくても、落ちて行く様な危険はあるにはあるわね？』

Kは黙つて、政代の顔を見詰めるやうにしたが、暫く經つてから

『つまり早く京城に伴れて行かないことが不平なんだね？』

『さうね、それもあるかも知れないのね。しかし、そればかりぢやありませんね。私のためにも、貴方のためにも、一日も早く京城に行く方が好くはないかしら！と私は思ふの——』

Kは再び政代の方を見詰めて、

『それには、何かわけがあるのかね？』

『いえ、別にわけつていふこともありませんけどもね』

『やあ……』

『本當にわけなんかありやしませんけども……』今度は政代の方がつとめてそれを打消すやうにして笑つて、『でも、本當にさうなんですものね。男はすぐさういふ風に冷めて行つて了ふんですもの』

『そんなことはないと思ふね……』ちよつと途切れて、『それやね、早く行けつて言ふなら、行つても好いけれども、何もそんなに一日を争ふやうなことを言はなかつたつて好いと思ふんだ。一體、それを元にして、その京城に行かないことを理由にして、愛情が冷めなくなつたの、さめたのつて言ふのはちと酷だね！』

『さうでせうかしら？』

『だつて、始めに約束したことをやめるつて言ふぢやないんだもの……。唯、用事があつて、少し後れるつていふだけのもんだもの……』

『だから、それはわかつてゐますよ。しかし、もし』かう言ひかけて、止して、考

へて、『これはたとへよ。本當だなんて思つては駄目よ、本當にたとへなんだから……ね、よう御座んすね。たとへば、あのNさん、あの人と私との間が單に友達關係でなくつて、一度わけがあつて別れた男とか何とかであつたら何う？ 貴方だつて、さうしたら、私を此處に放つて置きやしないでせう？』

Kは頭を振つたが、

『それと言ふんだね？』

『さうぢやないんですつたら！ それを本當にしちや駄目だつてあれほど言つたぢやありませんか。それは誰にだつてきいて見ればわかるんですもの……。え、無論さうですとも、唯例に引いたんですとも——』

『……？』

何うだかわからないといふやうな顔の表情をして、Kは深く黙り込んで了つた。政

代はすぐ言葉をついで、

『だつて、考へて見たつて、わかるぢやないの？。もし、本當に、さうだつたら、誰が本當に、そんなことを齟舌るものがあるもんですか。貴方それがわからないの？』
成程さうだと思つたらしく、考へ込んだ顔をKは擽げて、

『別に、疑つてゐるツていふわけでもないけどもね……』

『本當に、疑つちやいやですよ。唯、例に引いた丈けなんですから……』Kの顔の表情から、いろいろなこと、たとへばもしNとの關係が知れたらKは何う思ふだらうかといふこと、さういふことを細かく搜すやうにして、『もし、さういふ場合だつたら何う？。一刻も早く京城に伴れて行つて下さるでせう？』

『さアな……』

また、Kは考へ込んだが、やがて、急に、『まア、そんなことはあとにしよう……』

よくお互に考へよう！。それよりも、それよりも……』

『しかし、まだ疑つてゐるにはゐるのね？』

『いゝよ、そんなことは、何うでも——』

『でもね、疑はれてゐてはいやですからね』こんなことを言つて、笑ひながら政代は廊下の方に出て行つた。廁へと行つたのであつた。

政代は亂れた髪を取敢へず輪櫛で梳き上げながら、

『もう、しかし、別れやうたつて駄目ね……』

『それはさうとも——』

『かうなると、心ばかりぢやないんですものね。體も、魂も、皆んなさうなつて了

ふんですものね……。』艶な、蠱惑的な、男の魂を奪はずに置かないやうな、また、かうして置けば、何んなことがあつても、男は離れて行かないといふ自信があるやうに、じつとKの顔を見詰めながら、『矢張、縁ね。さう言へば、始めて逢つた時から何だか、他人ぢやないやうな氣がしましたもの』

『僕だつて、さうだ——』

かういふ風に政代はいそ／＼と嬉しさうにして、『かういふ風に、しつかり結びつけば、京城に行くことなんか、もう問題ではなくなるんですけどもね……。矢張離れてゐると、駄目ね。ひとり手に、疑惑が起つてきたり、頼りなさを感じて來たりするんですもの……。矢張、女は弱いよね』

『信用しないからだよ……。人間は何でも疑つては駄目だよ。此方で疑へば、何うしたつて、向うだつて、水臭くなつて來るからね』

『それは本當ですな……。私のやうなものは、ことに、さうかも知れないのね。それが悪いんですね』

『さういふ點はあるね。頭のはつきりしてゐる才女には、何うしたつて、さういふところがあるからね。落着いてゐられないやうなところがあるからね』

『さうでもないんですけどもね……。』ふと、別なことを深く考へるやうにして、言ひ出さうとして止して、また考へ直して、

『貴方に、是非ひとつ言つて置かなけりやならないことがあるんですがね……。』

かう思ひ切つたやうにして言つた。政代の顔がいくらが赭くなつて來るのをKは見た。

『……』

『怒つちや、いやですよ』

『何だね？ 一體——』

『怒りさうね』

政代は言ひかけて、また止した。

Kは大抵わかつたといふやうにして、急に不機嫌に且つ突詰めた顔の表情をしたが、しかも、さう打出された上は、聞かすには置かれないといふやうに

『何うしたんだえ？』

『だつて、怒りさうなんだもの……』政代はまた顔を赧らめ乍ら『でも、かうなつては、もうかくしてゐるわけには行かないのねえ。そんな水臭いことは出来ないんですもの……實はね、實はね、コンフエツションすれば——』

『……？』

『矢張Nさんと一時さうだつたんですの……。ほんの、短い間だつたんですけど……』

……それで、一刻も早く、成るべくなら、顔を會はせず、此處を立つて行きたいと思つて、それで、此間、電話をかけたんですの』

『ふむ——』

Kは頭を振るやうにして、『ふむ……。さうすると、さつきは嘘を言つたわけにかゝるんだね？』

『だから、コンフエツションをするんぢやないの……。もう、かうなつては、そんなことを胸に仕舞つて置く必要がなくなつて了つたやうな氣がしたんですもの……。それはさつき、まだ、心配だつたので、つひあんなことを言つたんですけどもね……許して下さるわね』かう言つて、政代は笑ひを含んでKの顔を覗き込んだ。

『それで、何うしたえ？ もう逢つたんだね？』

Kの眼は鋭く光つた。

『逢つたには逢つたわ。何うしたつて、こゝにゐては、逢はずにゐるわけには行かないんですもの……』

『いつだね？ それは？』

『昨日の午後……』

『……』Kは何か言はうとしたが、しかも言はずに、頭を低れたまゝ暫くはじつとして身をも動かさなかつた。いろ／＼のことが早く早く其頭を掠めて通つて行くらしかつた。今までの享樂も何も彼も、いつか何處かに行つて了つたかのやうに見えた。

『で、何うしたね？ その結果は？』

かうKが訊いたのは、尙ほ暫く經つてからのことであつた。

『別に、何うも——』

今度は、さつきと違つて、政代も度胸をきめて了つたらしかつた。かの女は急に才ましたやうな態度を取つた。それは丁度さうした場合に於ける男の苦悶を、これまでも、散々見て來た男の苦悶をじつと見詰めてゐる様にも、または、その苦悶の状態の程度の如何によつて、かの女の方に偏つて來てゐる男の戀心の度数を計る權衡にしてゐると思はれるやうな形であつた。政代には最早さつきの顔を赧くしたやうな無邪氣な表情はなくなつて了つた。

『それで、何ういふ話をしたえ？』

この質問のへろへろ矢ではとても女の胸を貫くことは出來ないのを十分知つて居ながら、爲方がなしに、Kはかう言つて見た。

『別に、何うツて、長い話もしませんの……。廊下でちよつと立話をしたばかりですもの』

『何んなことを言つてたね？』不機嫌な自分の心の調子を失つてはならないと思ひながら、さう話して行く以上、何うしても碎けた調子にならずにはゐられないのをKは痛感しながら、

『昔の話でも出たかね？』

かう言つてつひ苦しさうにして笑つて了つた。

『そんな話をするひまなんかあるもんですか。奥さんやお嬢さん達の話をした位なもんですもの……。それやね、喧嘩をして別れたんぢやないんですから、逢つたつて、お互ひに顔を赧らめ合ふやうなことはないんですけども……。』かう言つてKが何か言つたのを聞いて、『え？ 何をするぞ？ まま何うかなりやしないか？』そ

んなことは出来はしませんよ』男の心を捉へずには置かないといふやうに艶に笑つて見せて、

『存外、顔を合せても、何でもないもんですね。親しい友達位にしか思はないもんですね』

『そんなことはない……』

Kは強く頭を振つて見せた。

『ぢや、何う言ふの？』政代はいくらかつツンとして、『ぢや、私がまたNさんと何うかしやしないかつて言ふの？ さう疑つてゐるの？、』

『さういふわけもないけど……』

『でも、矢張、信用が出来ないつて言ふのね？』

『だつて、さうぢやないか』Kは突込んで、『さつき、そのため、京城に早く伴れて

行けッて言つたぢやないか？』

『それはさうねえ、さう言つたわねえ、始めに大連に電話をかけた時には、その心配だつてあつたにはあつたんですもの。でも、もう大丈夫ですよ。もう疑はなくなつても好う御座んすよ……。でも男ツていふものは何うしてかう女の心がわからないんでせう？』政代はぢれつたさうにその身をKに凭せかけるやうにした。

『大丈夫ですよ。そんなことはありませんよ』

『でも……わからないからな、さういふことは——？ それなら、それで、今、ちやんと言つて貰う方が好いんだ』

『大丈夫ですつたら？』

政代はわざと投り出すやうに、『そんなに信用が出来ませんかね？ 私は？』少し考へるやうにして、

『もう遠い昔の昔のことなんですもの……。そんな氣持になりたくつたつてなれやしないわ』

でも、さういふことは常識では言ふことは出来ない。また、さういふことになつたにしても、常識で答めることは出来ない……。それでゐて、黙つて容認して見てゐることは出来ないことなのだから困る……。かうKは突詰めて考へて見たが、しかし、それを政代に言ひ得るほどそれほど軽い洒脱な心持になることは出来なかつた。

『昔のことは仕方がないがね。濟んだことだから、夫は言はないがね。新たにどうかなつて行くやうなことがあつちや困るんだ……。』

眞面目な調子でKは言つた。

『そんなことはありませんよ』

『ありませんよたつてそんなに笑ひながら言ふやうぢや駄目だ。もつと本當にさう思つて呉れなけりや——』

『なら、本當に——』

わざと眞面目な顔をして、強く押しつけるやうに言つたが、その言つた形が可笑しかつたので、政代はぶつとふき出して了つた。

しかしそれ以上は、Kにも何うすることも出来なかつた。大連に伴れて行くわけにも行かず、さうかと言つて奉天に行けば、いろいろ噂に立てられる處があるし、一番良策は、矢張政代が言ふやうに一刻も早く京城に伴れて行くのが好いのであつたが、さうかと言つて、明日にもといふわけにも行かないのであつた。

Kはひとつの大きな苦勞——夢にもその前にさうしたものが控へてゐるとは思はなかつた苦勞、また、政代のやうな女には、早晚さうしたことがやつて來ずにはゐないかもしれないにしても、しかもさう早くやつて來ると思はなかつた苦勞が、わびしく暗い憂鬱な氣分を避くべからずにかれを誘つた。さうかと言つて政代を咎めるわけにも行かなかつた。政代には咎められるべき何等の罪もないのであつた。否、普通には言ひ難きことも敢て言つて、そして立派に告白してゐたのであつた。それは今に際して、更に新しい關係でも出來たといふならば、いかやうにも責むべく咎むべき理由はあつたであらうけれども、たとへ將來に於てさうした危険は豫想されるにしても、またそのためかれが苦しんでゐるにしても、現在では政代が負はなければならぬ責任は何一つないのであつた。Kは何うすることも出来なかつた。

いつそ告白して呉れたのが情ないやうな氣がした。告白さへして呉れなければ、さうした杞憂は起らなかつた……。では、自分は恰でそれを知らないである方が好いか？ かの女の胸の底の秘密としていつまでも藏されてある方が好いか。そしてNとかの女とが廊下で話したことをも全く知らずにゐる方が好いのか。否、否、否、とてもそれはかれには堪へられさうにもなかつた。(爲方がない……。今になつては、成行を見るより他爲方がない、果してかの女の言ふやうに、さうしたことになるやうになることはないか何うか？ 單に其の友達としてNと口をきくにとどまるか何うか？ しかし、もう少し成行を見てゐて、果してそれが焼木杭になつたら？) かう思ふと、かれは體が辛く辛くなつて來るのを避けることは出來なかつた。

こんなことで苦勞するのは馬鹿々々しいやうにKには思はれた。

『嫉妬をやく位なら、よす方が好いね……。その方が本當だ……。女に他に男があらうが、何うしやうが、兎に角、自分への義務をつくしさへすれば、それで好いぢやないか。それで、満足すべきぢやないか』その道にかけては、通人とも言はれ、苦勞をしたとも言はれてゐる友人のSが、かうKに話したことがあつたが、その言葉をK自身も(本當だ！)と思つて感心して聞いたことがあつたが、しかし、今、かうして實際に臨んで見ると、さう簡単に片付けて了ふことも出來さうに思はれなかつた。いかに馬鹿々々しい苦勞でも、愚な嫉妬でも、そのまゝ、投げ出すやうに未練氣なしにやめて了ふわけには行かなかつた。

(自分が手を出した自然の報酬だ！)

かうKは後悔して見たところで、さて何うすることも出來なかつた。

それに、女にさうした相手があるといふことが、益々かれをして女に執着させて行く焦躁を避くべからずその胸に燃え上らしめた。否、そればかりではなかつた。さうした場合に、常に最も有効に利用される女の魅力が、魔の手が既に犇々とかれの體の内まで喰ひ込んで来てゐた。(まア、爲方がない。成行を見るより他、爲方がない……。當人だつて、そんなことはあり得ることではないと言つてゐるんだから……。)かう思つて、そのままに自然に任せて置くより他に策はなかつた。

Kは昨日此處にやつて来る時、都合が好かつたら、N男爵にも逢つて行きたいと思つて来たのであつた。曠山の方ではないけれど建築の方で、逢つて話して置く必要が多少はあつたのであつた。しかし、今はさうした心は微塵もなかつた。昨日歸つて来る筈であつたNが今朝になつても歸つて来ないのが却てかれには喜ばれた。それでゐながら、もし出来れば、政代の手を利用してNを此方に引張寄せたいとい

ふ考へは、持つてゐないことはないのであつたけれども……。

『何うしても、八時ので歸るの?』

かう政代が訊くと、

『何うしても歸らなければならぬ。昨日来られないのを、やつとのことのでやつて来たんだから——』

『なら、また、明日来て下さる?』

『何うだかわからんねえ……。忙しいんだからね。しかし、成るべくちよいちよいやつて来るやうにするにはするよ』わざと軽く笑つて、『ひとりで放つて置くと、げんのださうだからな……』

『大丈夫ですよ。それは——』

笑顔を凭せかけるやうにして政代は言つた。

『本當に大丈夫かしら？』Kは軽い調子を改めずに――。

『大丈夫ですよ』

で、二人は暫く黙つた。かれ等の心には種々なことが通つて行つた。Kはすぐ憂鬱になつて行つた。

『そして京城の方は何うするの？』

『さア、まだわからんね。何しろ用事がまだたまつてゐるんだからな……』ふと思ひ付いたやうに、また女の心から何物をか捜すやうに、『君、ひとりで先へ行つてゐるか？』

『さうね……』と、政代は躊躇の色を顔へあらはして、『何せ、京城ツていふところ、ちつとも知らないんですからね。せめて知つてゐる人でもあればそこに行つてゐるといふこともあるけれど……』

『ぢやまア、落着いて待つてゐるさ……。京城で待つてゐて貰ふより、此處で待つて貰ふ方が好いんだから……。此次に來た時、何うか話をきめて來るよ』Kはそれにつけて、(本當に眞面目にしてゐて呉れなくつては困るよ)とか何とか言ひたかつたけれど、しかもそれが何となく厭味になつて了ひさうなので、そのまゝ口を噤んで了つた。

Kは大連にゐても、氣になつて氣になつて爲方がないので、その翌々日には、また湯崗子の方へと出かけて行つた。

しかし別に變つたことはなかつた。女中のお増は相變らず愛想が好く、上さんもわざわざ出てかれを迎へ、政代は政代で、落着いた形で靜かに離座敷の方から廊下

まで出て来た。(N男爵は?)かう打つけてぢかにはKは訊きはしなかつたけれど、ひとり手に話はそつちの方へと持つて行かれた。

政代は平氣で、

『昨日行け、行けツて言ふから行つて見たわ』

『鞍山に?』

『え……。爲事は始めてゐても、まだほんの少しね……』

『ふむ——』

Kは頭を押へた。やがて、

『Nさん、ゐるかえ? 今日?』

『ゐるでせう、屹度……。さつきゐましたから——』

(僕のことを話したらう?)かうすぐKは訊かうと思つたけれども、何うしてもそれ

はその口から出て来なかつた。

『貴方、行つたことあつて? あそこへ? 鞍山へ?』

『一度行つたことがある』

『好いところね……あそこ。事務所のあるところなんか、何とも言はれないわね。あそこから見ると此方の方は丸見えね。まだいくらか紅葉も残つてゐましたよ』

『Nさん、平生はあそこにゐるのかね?』

この質問は、Kに取つては、かなり思ひ切つたものだつた。

『さうね。此方に來たり、彼方へ行つたりしてゐるらしいのね、泊るには泊れても、どうも事務所は、手がなくつて、不自由でいけないなんて言つてゐたわ』

『どうだね? 復活は出來さうかね?』Kは何うしてもかう意氣込まずにはゐられなかつた。

政代は依然として平氣で、(そんなに妬くもんぢやありませんよ)と言つたやうな顔の表情で、『そんなことは駄目ね。他から見ると、さういふ風に見えるでせうけども、當つて見ると、存外さういふもんぢやありませんね。お互に、お互のことをよく知つてゐますからね。弱點も何も彼もよく知つて居ますからね。さういふことは容易に起らないもんですね……』

『……(何うだか知れたもんぢやない)といふ顔をKはして見せたが、皮肉に、『事務所に泊つて来たわけぢやないんだらうね?』

『そんなことはありつこないぢやない? そんなに疑ふなら、詳しく話して聞かせませうか。昨日、天氣が好かつたでせう。それに頻に行かないかつて言ふから、それで行つたんですけどもね。え、さう、技師のHさんも一緒に رفتんですの。あつちに着いたのは十一時でしたね。そこで晝飯を御馳走になつたり何かして、鑛山

の入口まで行つて、また引返して来て、事務所まで四時頃まで、ゆつくり遊ばして貰つて來ましたの……。岩山に疎らに紅葉が残つてゐるさまは内地では、ちよつと見られない景色だと思ひましたよ』Kの顔を見て、『それにNさんは用があると云ふので、歸りは、技師のHさんと二人で歸つて來ました。Nさんは向うに泊つたらしかつた……』

『それは面白かつたね』しばし途切れて、『今度は、N男爵にも逢つて行きたいと思ふんだが、別に差支はないね? 君は?』

『え、別に……』かう言つて政代は笑つた。『何うせ、かへるんだから、知れたつて構はないわ』

『でも、變には變なもんだな』Kは考へて再び頭を押へるやうにした。

KはNに逢つた。

無論、それはNの室へKの方から出懸けて行つたのであつた。KにはNに是非逢つて置かなければならない用事もあつた。またNの軀の中に藏されてある政代のこともそれとなく搜りたかつた。この前に、逢はずに歸つて行つて、そのために、深い疑心暗鬼に虐まれたことを考へると、今度は、何んな厭な思ひをしても、Nにも逢ひ、出来ることならその真相をさぐらなければならぬと思つた。

『ヤア』

かうNはいつもの微笑を満面に湛えながらかれを迎へた。別に變つたところもなかつた。矢張肥つた、血色の好い、丈夫さうな體格であつた。口髭を短く刈つたの

も髪をアメリカ風撫でつけたのも黒い中にいくらか白髪の雜つてゐるのも、話をする時に可愛らしく口元に笑を含むさまも、すべて皆な同じであつた。この二月ほど前に逢つた時と少しも異つたところはなかつた。それでゐながら、Kは口で言へないやうな一種厭な重苦しい壓迫を感じた。

言ふまでもなく、それは政代がそこにゐるからであつた。その體の中に、またその血の中に、その唇の中に、口髭に、髪に政代がこびりついてゐるからであつた。さう思ふと、話をしてゐながらもKはをり／＼變な氣分になつて来るを禁ずることが出来なかつた。體が熱く熱くなつて來た。

いろ／＼な光景が避くべからずにKの頭を掠めて通つて行つた。それはK自身と政代との間に取交されたさま／＼の光景の複寫見たいなものであつた。また此方から其方へと映して見たやうなものであつた。Kはまた辛い壓迫を感じた。(それに

しても不思議だ！何うして、かう深く入つて來たらう。何うしてかう短日月の中に、その巴渦の中に引張られて來るやうになつたらう。こんな考へが次から次に起つて來てはすぐ消えて行つた。表面で、話してゐる平凡な話、その奥には、さうした刺戟と衝動とが凄じく且烈しく巴渦を捲いた。

『さうですね。もう、始めますよ。さういつまで、放つて置くわけには行きませんから……。その時はまたひとつ心配して戴かなければ……』

かうN男爵は落附いた調子で、いつものやうに微笑を口のあたりに湛えて、そして言つた。別に平生と變つたところはなかつた。しかも此方の思ひ做しか何うかは知らぬけれども、その一枚剝いだ膜のかけには、矢張、同じやうに、そのさまざまの光景と、色彩の濃い舞臺と、刺戟と衝動とが深く藏されてゐるのが歴々とKにもわかるやうな氣がした。話をしてゐる中にもその眼は絶えずかれに向つて深く注が

れてゐるのをKは見透すことが出来なかつた。

しかも、政代のことは、竟に竟に口に上らなかつた。Kにしては政代とNとの仲の何ういふ形にあるかを探りたいのがNに逢つた大きな目的のひとつであつたのであるけれども、しかも、それを平氣で打出して話し合ふほどそれほど軽い氣分には何うしてもなれなかつた。最後にはKは何氣なく訊いた。

『まだ、此方に長く御滞在ですか』

『いや、もう歸な。つちやならないんだけど……。中々、用事が片附かなくなつてね』
ジロリとNは、の方を見た。Kは自分ながら馬鹿なことを訊いたものだと思つたひとりで顔が赤くなつて來るのを感じた。氣分がむしやくしやくして來た。

その夜、政代の發意で、N男爵をかれ等の室に招待したことを後になつてもKは忘れなかつた。實はKはさういふことは餘り望まなかつたのであつたけれど、政代が何うしてもさうしたいと言ふので——さうする方が却てかの女の位置をNに肯定させる形になると言ふので、夫で強ひて夫を實行することにしたのであつた。Nは別に異議なく喜んでやつて來た。

酒になつてからも、Nは決してその昔話には觸れなかつた。それに政代に對する態度でも、別に變つた形はなく、中年の女に對する禮を失はない程度で、いかにも世間馴れた、外交に巧みな、話の上手な紳士をKは發見した。昨日、鑛山に行つた話などが頻りにその口から出た。

『あそこに、もう少し好い事務所をつくと好いんだが……。何うも、狭くつて汚くて爲方がない』

かうNが言ふと、政代は、

『そんなことはないぢやありませんか。汚いことなんかちつともないわ。好いところですよ』

『それはところとしては好いんですよ……。眺望だつてわるくはないんですけどもね。何うも狭くつて……。私が一人行つて泊る設備すら、まだ十分にはないんですからな』

『防寒の設備は？』

かう盃をさし乍らKが訊いた。

『防寒の設備なんか出來てゐるもんですか。冬は留守番が隅の方にゐるばかりで、あとは閉めつきりです。あそこも、せい／＼今月一杯ですな』

『さうですか、それぢや困りますな……。もう少し何うかなさらなけりや』

『來年からは、何うかしなけりやならないでせう……。仕事だつて、もう少し發展させる豫定ですからな——』

かうした平凡な話の中にもKは決して細かい觀察の眼をいたなかつた。かれはあらゆる空氣から、氣分から、眼から、態度から、その中に藏された祕密を嗅ぎ出さうと注意してゐた。しかし、いつまで行つても——かなりに碎けた酒になつて行つても、Nの態度は始めと少しも變らなかつた。Kと政代との間についても、成るべくそれを認めないやうに、またそれを認めてもつとめてそれに觸れないやうにしてゐるらしく見えた。Nが政代に話しかける時は、いつも谷山さん、谷山さんとその姓を呼んだ。

『谷山さんなんか、男まさりだからな。男の行けるところなら、何處にだつて行けるんだから……。さう思ふと美しい人は……誰だつて、美しい人には、優

しくしますからな。何んな遠い異郷の地に行つたつて、美しい人に辛く當る者はありませんからな』こんなことを言つてNは笑つた。

『でも、心細くないことはありませんわ』政代はKの方をちらりと見るやうな形をして、いかにも親げに言つた。

矢張、しかし、何處かに不自然な、不愉快な、また不機嫌な空氣が渦を巻いてゐることを否定することは出来なかつた。従つて、何ぞと言ふと、席はすぐしりかけかかつて來た。それを政代は一生懸命に、つとめて陽氣に、快活にするやうにと心がけた。政代は北京での自分の失敗談等を持ち出した。

いくら一緒にその心持を雜り合はせやうと試みても、また、いくら二人の男の間に、何處かに共通點を認めさせやうと骨を折つても、しかもそれは到底無駄な努力であるといふことを政代も次第に痛感するやうになつて行つた。急に、政代は溜息

をついたりした。後には政代はぐつたりしたやうな疲労した心持で、酒にわる赤くなつた二人の男の顔を見較べた。

政代はひとり手にまたさうした徑路になつて行つたことを悲しんだ、さういふ徑路は、さういふ苦悶は、またさういふ風に忽ち三つの心の巴渦になつて行く形は、何うしてもかの女には避けることが出来ないものであらうか。何うしてもかの女には免るゝことを得ないのであらうか。考へて見ると、今までのかの女の閱歷を取巻いてゐるものは、すべてさうした三つの心の巴渦であつた。いつもかの女の周圍には二人以上の男がゐた。

時にはそれが何等かの因縁のためのやうに思れることもないではなかつた。ある

人が言つた言葉、それはかの女の薄情に對して眼をむき出すやうにして叫んだ言葉であつたが、その言葉がをり／＼氣味わるくかの女の頭に蘇つて來た。『忘れずに覚えてゐる……、さういふ量見なら、一生さういふことを繰返さなければならなくなるから。三つの心がいつまでも屹度ついて廻るから。出刃庖丁でも刺されて、死ぬまではついて廻るから……』

つひ、十日ほど前、Kに向つてひとり手に、避くべからずに起つて來たと同じやうな戀心が、矢張りNに對して熾んに起つて來るのを感じた時には、かの女はいくらか恐ろしいやうな氣分にすらなつた。この前、東京にゐた時にも代議士と貿易商の紳士との間に、さうした突詰めた形がいつとなしに出來て來て、其のため板挟みになつて、それで一時支那に身を躲さなければならぬやうになつたことなどを考へると、無闇にNに身を任せて行くことは出来ないやうな氣もしないではなかつた。

政代は一時つとめてそれを避けるやうにしたことを思ひ出した。

『だつて、さういふことには、もうお互に厭きてるぢやないの……。つまりませんものね』

わざと冷靜を表面に装ふやうにして、政代は言つた。

しかし男心は容易にそれを承認しやうとはしなかつた。それも或は一方にKといふものがゐなかつたなら、それほど熱心にNも出て來なかつたかも知れなかつたのであつた。單に昔、關係した女くらゐなところで、何の事もなく通過し去つて了つたかも知れないのであつた。しかし、今になつては、最早手を引いて了ふことは出來ないやうな熱烈さをNは次第に持つて來てゐた。否、政代の方にしても、表面ではさういふ風に冷靜を装つて見せてゐるけれども、しかもその内部が、かなりに烈しく燃え出して來てゐるのをNも見遁すやうなことはしなかつた。

『一緒に東京に歸らうぢやないか。これからは、滿洲や朝鮮は、とても寒くつてゐられやしないよ。なアに、噂の嫉妬なんか、何でもありやしない……。あの時分から比べれば、僕だつて、社會的に出て働いてゐるし、年だつて取つたからね』

かうNが言つても、

『厭、厭！私はまだ東京なんかには歸れない……』

かう政代は頭を振つて見た。

『何故だえ？』

『理由は申しませんが、本當にさうなんですの。東京になんか、まだ歸れないんですの』

『恨まれてゐる人がゐるんだね』

その時はそれきり黙つてゐた。しかし、何うすることも出來ないその戀心——そ

の戀心の中には、今までの男心の恨みやら呪ひやらがちやんとかくされて入つてゐると思つたけれども、しかも、何うしても、その戀心を捨て去つて了ふことは出来なかつた。

(恨まれても爲方がない、呪はれても爲方がない……。また、其ために、何んなに辛い^つ苦しい思ひをしたつて爲方がない……。また、あの男が言つたやうに、そのために、終には生命をも捨てなければならぬ様になるかも知れない、けれども、それだつて爲方がない) 次第にさういふ風な熱情的な心持の方へと政代は伴れられて行つた。

『夕方までに歸れば好いだらう? おそくなつたら、誰かに送つてよこさせるから』

Nはかう言つて頻に同行を勧めたけれども、政代はそれには容易に従はうとはしなかつた。

『矢張、氣が咎めるかね?』

『そんなことはないけども——』

『なら、好いぢやないか……。あそこいらまで散歩するには、持つて來いつていふ天氣ぢやないか?』

『さうね——』

それでもまだ政代は二の足を踏むやうにした。しかし、行つて見たくないことはなかつた。久し振で、Nと歩いて見たくないことはなかつた。政代は其處から此方に出て來て、大連に電話をかけて見た。

Kはゐなかつた。代理にM氏が出た。『あゝ谷山さんですか。お久し振でしたね……』

……。一度、そつちにあそびに行きませうか』などと言つた。M氏の話では、Kは用事で今朝から旅順まで行つて留守だといふことであつた。今夜は歸つて来るか何うかわからないといふことであつた。それは無論戲談半分と言つたのであらうけれど、此頃旅順にお馴染が出来てゐて、かなり深い仲になつてゐるらしいことなどをM氏は笑ひながら言つた。しかし、政代はそれに答へずに、『本當にいらつしやいねえ、近い中に……。待つてゐますよ』かう言つて電話を切つた。

やがて政代はNの室へと入つて來た。

『ぢや、行つて見ませうか?』

『行くかえ?』Nは嬉しさうにして立上つて、『それは難有いな……。ひとりぢやつまらないと思つてゐたから』

『天氣が好う御座んすからね』

政代はわざと顧みて他を言ふやうにして、そのまゝ窓のところに行つて、初冬の美しく晴れた午前の日影をなつかしむやうにして眺めた。

Nもやがてそこに來て、肩を並べるやうにして、『もう、今日なんか、滿洲での小春日の最後だね。霜が日増しに深くなつて行くからね。それに、風が出たと來ちやとても、滿洲は歩いてなんかゐられやしないからね』

『それはさうでせうね……。』

で、二人は揃つて出懸けた。見送りに出て來たお増が、『夕方迄にはお歸りにはなりませんね?』と訊くと『え、え、歸りますとも……。唯、散歩にちよつと行くだけですから……。』かう政代は答へて、そして平氣で出て行つた。

二人はいかにも睦じさうに見えた。或は新建の人家の並んでゐるやうなところ、或は矮鷄が二三羽餌を啄いてゐるやうなところ、また時には、支那の民家の土壁に

楊柳が垂れ下つてゐるやうなところ、さういふところを次第にひろくとした野の方へと向つてかれ等は歩いて行つた。駱駝の脊のやうな形をした鞍山は、くつきりと晴れた碧い空に——滿洲でなければ見ることの出来ない碧い空に擦したやうに低く靡いて、遠くの黄褐色をした、うね／＼と折れ曲つた路には、支那苦力が長い鞭を翳して、頻に荷物を満載した驢馬を叱してゐるのか手に取るやうに見えた。

あるところに来て日影が眩ゆいといふやうに、政代は黒い地に白く花の模様の縫ひのしてあるバラソルをサツと展げた。

『でも、今時分になつて、こんなところをかうして一緒に歩かうなどは、少しも思ひませんでしたね?』

『本當だね』

『だからわるいことは出来ないのね。何處で何んな人に逢ふかわからないから……』

これにはNは答へなかつた。二人は纏れるやうにして歩いて行つた。

Nは笑ひながら、

『それで、何うするつもり? すつと此方にゐるつもり?』

『まだ、きまつたわけぢやありませんけどもね、何うしても、さうなるだらうと思ひますね』

『寒いぜ! 此方は?』

『さうですつてね、内地から来たものには、最初の一年は随分辛いさうですね』

『辛い以上だよ』

『貴方はゐらつしつたことがあるの? 冬? いつ? それは?』

『さうだね……』少し考へて、『この鑛山の初めて計畫された時だから、かうともう去々年になる……』

『さう？ 此處で冬を越したことがあるの？ 大變でしたでせうね？』

『何しろ、冬になると、あの温泉場だつて十分な設備がしてあるといふわけではないからね。あそこにだつて、とてもゐられやしないよ。だから、用がすむと、すぐ大連まで歸つて行くやうにしたよ』

『大連なら、大丈夫？』

『大連だつて、寒いね。骨にまで滲み透るやうな寒さだからな……。それに風が切られるやうに冷めたい。まア、しかし、あそこなら設備があるから、ゐるにはゐられるけれど……』言ひかけて笑つて、

『矢張り東京に歸れないわけがあるんだね……』

『さういふわけでもないんですけども、東京に歸つたつて評判ばかりわるくつて、誰も相手にしては呉れませんもの……』

『そんなことはないだらうがね……』

Nはそれきり黙つて歩いた。路は次第に川の方に下りる斜面へとかゝつて行つてた。

Nにしても、政代にしても、もつと深く話を進めたいとは思はないではなかつた。しかし二人ともこれから先には、容易に入つて行けさうにも思はれなかつた。それに、その境は、一度かれ等が入つて行つて見たところだけに、一層觸れ易くてそしてまた入り難いやうな形があつた。Kについての話も、Nの口から何遍となく出かかつては、また何遍となく飲み込まれて行つた。

ところが思ひ切つたやうに、突如としてNは言つた。

『餘程、長いのかね？ もう……？』

『何が——？』

『何がつて、わかつてゐるぢやないか。今、世話になつてゐる人さ——？』

『Kさん？』

『かうや……』

Nは笑つて見せた。

『世話になんか、まだなつてはゐないわ。唯、この夏中、大連にゐた時分、大變親切にして呉れた人には人だけでも……？』

『だつて——？』

それは承認が出来ない、女中達からも多少きいてゐるといふ顔の表情を、Nはして見せた。政代はわざと平氣で、

『それはね、さう思はれたツて爲方がないにはないわ……。しかし本當に、世話になんかまだなつてゐないのよ』

『而し、立派な紳士だよ、Kは』半ば眞面目に半ば笑を含んだやうにしてNは言ったが、すぐ突込むやうにして、

『でもしやうがないもんかな？ 何んなどころに行つても、相手がなくつてはゐられないもんかな？ 女は？』

『だつて、男だつて、さうぢやありませんか？ 同じことですよ』かう言つて政代は笑つた。

『男と女と同じにされちや堪らないね』

『何うして？』

政代は眞面目になつて問ひ返した。

『まあ、好い、好い……』話が理窟になつて來るのを避けるやうに、また、會てさういふ理窟で油を取られたことがあるのを思ひ出しでもしたといふやうに、Nはそそくさと其自分で持出した話を取消すやうにした。

氣が附くと、二人は既に斜坂の半を歩き盡してゐた。下には川が白く、ところどころに洲をつくつて丁度布でも晒したやうに美しく流れてゐるのがはつきりと水彩畫でも展げた様に見渡されてゐた。

『もう歸りませうか?』

政代はわざとこんなことを言つて見た。

『何うして?』

『何うしてツて、別にわけもないけども……』

『氣にさはつたかね?』

Nは笑つて見せた。

『氣になんかさはりやしませんよ、貴方の我儘は昔から知つてゐますから……』

『これは恐れ入つたな』

『だつて、さうぢやありませんか。貴方が我儘で、私が我儘で、それで別れることになつたんですもの……』

『でも、もう僕の方は、昔のやうに我儘ぢやなくなつたよ。おとなしくなつたよ』

『何うだか?』

『それはたしかだ……。誰にでもきいて見たまへ。君の方は何うかわからないけど……』

『も……』笑つて政代の目の中を覗き込むやうにして、『今の態度で見ると、君の方

矢張昔のまゝらしいね』

『さうかも知れませんが……』わざとすねたやうにした政代はさつきの主張を改めずに、『本當に歸らうぢやありませんか』

『まア、そんなことを言はずに……』

『貴方は何うしても行かなくつちやいけないの？』

『行かなくつちやならないといふこともないけども、行けば行く方が好いだ……』

『昔の情婦なんか伴れて行かなくつたつて好いぢやないの？』

『まア、好いつていふのに……。矢張氣にさはつたんだね。それなら、あやまるよ』

『それに、またあの川の徒渉をしなくつちやならないんでせう？ 足袋を脱いだり何かすることを思ふと、厄介なもの——』

政代は靜かに美しく流れてゐる川の方に眼をやつた。

Nは黙つて、あたりを見渡したが、『あ、好いことがある……。そら、あそこに、支那人が來たらう。あいつに頼んで負つて貰ふ方が好い……。』かう言つて、それを頼みにNは一散に其方の方に走り出した。

『駄目よ、駄目よ』

かうあとから政代は呼んだ。

走り出したのを中止したNは、

『何うして？』

『だつて、あんな汚い支那人なんか、私、負おまされると思つて？』

『さうか——』それもさうだなといふ表情をNはしたが、『それぢや僕が負おまつて渡つてやらう……？』

『駄目よ』

『何うして？ ちつとも駄目なことはないぢやないか。昔の情夫だもの、好いちやないか』

『駄目、駄目』

かう笑ひながら言つて、政代はそのまま、急いで川の岸の方へと下りて行つた。

そこには、葉の半ば落ちた川柳だの、赤い實のをり／＼交つて見えてゐる取藪などがあつて、美しい明るい日影が流るゝやうにさしわたつてゐたが、政代がそこに立留つて足袋を脱ぎかけてゐると、急いでその傍に寄つて來たNは、

『まア、好いから負されよ……。何も、そんなに、隔てを置かなくつたつて好いちやないか』

『でも——』

『すまない人があるかね？』

『そんなに負ひたけりや、勝手にお負ひなさいな』

本性を露骨に出したといふやうにして、政代はそのままNの肩に身を寄せた。何方かと言へば小柄な政代はやがて軽々とNの脊に載せられて、小春日の美しく照り添つた川を此方から向うへと越して行くのが見えた。

大正十一年三月十五日印刷
大正十一年三月十五日發行

彌野の巻
〔定價金五拾錢〕

田山錄

東京市神田區表神保町十番地

福岡益雄

東京市本郷區湯島五丁目四番地

佐藤三郎

東京市本郷區湯島五丁目四番地

共同社印刷所

發行所

東京市神田區表神保町十

金

星

堂

電話神田三三八九三番
三三八三三番
三三八二八番
振替口座東京三三八二八番

金星堂

名作叢書

▼ 森田恒友氏裝幀
 ▼ ホケット形新裝美本
 ▼ 定價各冊金五拾錢送料四錢

文藝の機運大に動くの時本叢書は破天荒の至廉なる定價を以て現文壇諸家の最も自信ある珠玉の名篇のみを提供せんが爲に生れたるものにして我が文藝の精粹を網羅す。即ち收むるところの小説及び戯曲は何れも現實の人生に徹して興味深く何人の胸にも強く強く響くと共に高朗の韻を永久の未來に傳ふ。あゝ誰か此叢書を讀まずして日本の新藝術を知れりと言ふを得んや。

11. 長篇小説 曠野の戀

愛慾の悩みを中心としたる代表的傑作也

田山 花袋

2. 創作選集 離るゝ心

最近の力作者にして「勝敗」「復讐」の二篇を添ふ

徳田 秋聲

3. 長篇小説 人さまたごま

發表の當時世評噴々たりし名篇にして附録に「妹の縁談」あり

正宗 白鳥

4. 戯曲選集 父歸る

この名篇の他に「茅の屋根」「温泉湯小景」等七篇を收む

菊池 寛

5. 長篇小説 友と友の間

友と友との戀の三角關係を描寫したる代表的力作也

菊池 寛

6. 長篇戯曲 牧場の兄弟

社會劇として上演されたる雄篇にして「地蔵救由來」を添ふ

久米 正雄

7. 創作選集 懶い春

代表的力作懶い春の他に「工廠裏にて」等數篇を收む

久米 正雄

8. 長篇小説 邪宗門

藝術の包ひ最も高き近來の珠玉の名篇なり

芥川 龍之介

9. 創作選集 銀二郎の片腕

名人の精神を凝らせるものにして「父親」「箱根行」等を收む

里見 弴

10. 長篇小説 彼女と青年

若き男女の強い戀物語にして全卷を貫く才筆を見よ

里見 弴

11	長篇 戯曲	恐怖時代	深刻を極めし稀有の名脚本にして上演直に好評を博す	谷崎潤一郎
12	長篇 小説	童	力作中一代に鳴る名作にして附録に「鶴唳」を添ふ	谷崎潤一郎
13	長篇 小説	床	代表的傑作にして人生の全景を展開して深刻を極む	藤森成吉
14	創作 選集	鼠	好評の傑作にして「母」も「雀」の玉篇を収めたる佳品也	藤森成吉
15	創作 選集	花と實と棘	従来の作品中より其精神を抜きたる稀有の逸作也	佐藤春夫
16	長篇 戯曲	二週間	現代劇の代表作にして附録に名曲「孔子の歸國」を添ふ	長與善郎
17	創作 選集	恭三の父	名作恭三の父の他に代表的作品三篇を収む	加能作次郎
18	創作 選集	祖母	發表の當時世人を驚かした名篇にして他三篇を収む	加能作次郎

19	戯曲 選集	水のおもて	代表的名篇のみを集めたる他に類例なき脚本	久保田万太郎
20	長篇 小説	九月	發表の當時噴々たる好評を得たる名篇にして他一篇を附す	久保田万太郎
21	長篇 小説	或女の犯罪	深刻と凄壯を極めたる傑作にして「労働者誘拐」を収む	江口漁
22	長篇 小説	屋根裏の戀人	作風一轉機せる代表作にして名作「あの頃の事」を附す	宇野浩二
23	長篇 戯曲	津村教授	上演されたる名脚本にして他に「穴」の一幕物を添ふ	山本有三
24	長篇 小説	死兒を抱いて	若き女の悩みを描きたる獨特の優秀なる作品也	廣津和郎
25	長篇 小説	月光曲	ロマンチックなる名作にして全巻を貫く感情流露の筆致を見よ	田中純

以下續刊

389
73

終